

津幡町

能瀬南B遺跡

2016

石川県教育委員会

(公財)石川県埋蔵文化財センター

の能瀬南B遺跡

2016

石川県教育委員会  
(公財)石川県埋蔵文化財センター

## 例　　言

- 1 本書は能瀬南B遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の所在地は石川県河北郡津幡町能瀬地内である。
- 3 調査原因是地方道改築事業(主)高松津幡線(河北縦断道路)工事であり、同事業を所管する石川県土木部道路建設課が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。
- 4 調査は財團法人石川県埋蔵文化財センター(平成25(2013)年度より公益財團法人石川県埋蔵文化財センター)が石川県教育委員会から委託を受けて、平成23年度から平成27年度にかけて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理、報告書原稿作成、報告書刊行である。
- 5 調査に係る費用は石川県土木部道路建設課が負担した。
- 6 現地調査は平成23・24年度に実施した。期間・面積・担当は下記のとおりである。

### 《平成23年度》

期　間 平成23年8月1日～同年12月21日

面　積 250m<sup>2</sup>

担　当 調査部県関係調査グループ

　　布尾和史(専門員)、荒木麻理子(主任主事)、木原伊織(嘱託調査員)

### 《平成24年度》

期　間 平成24年4月10日～同年8月8日

面　積 2,820m<sup>2</sup>

担　当 調査部県関係調査グループ

　　澤辺利明(主任)、山　晶裕(専門員)、木原伊織(嘱託調査員)

- 7 出土品整理は平成25年度に実施し、県関係調査グループが担当した。
- 8 報告書原稿作成は平成26年度に実施し、調査部県関係調査グループが担当した。  
執筆は澤辺利明が行った。
- 9 報告書編集・刊行は平成27年度に実施し、調査部県関係調査グループが担当した。
- 10 調査には下記機関の協力を得た。  
　　石川県土木部道路建設課、石川県県央土木総合事務所、津幡町教育委員会
- 11 調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。
- 12 本書についての凡例は下記のとおりである。
  - (1)方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標VII系に準拠した。
  - (2)水平基準は海拔高であり、T.P.(東京湾平均海面標高)による。
  - (3)遺構の名称は、下記の略記号に番号(算用数字)を付し表記した。  
　　S K : 土坑、S D : 溝、P : 柱穴・小穴
  - (4)遺物番号は挿図・観察表・図版で対応する。なお、観察表には報告番号や出土遺構、器種、調整等の遺物観察事項のほか、出土品整理時の図化番号を記載した。
  - (5)遺物実測図は、須恵器は断面黒塗り、その他は白抜きとし、弥生土器の赤彩、近世土師器の油痕は網掛けで示した。

## 目 次

第1章 調査の経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	1
第2節 発掘作業の経過	2
第3節 整理作業の経過	4
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	5
第3章 調査の結果	8
第1節 概要	8
第2節 検出遺構・遺物	12
第3節 まとめ	18
写 真 図 版	
報告書抄録	

## 挿図目次

第1図 調査区の位置	3	第14図 検出遺構・遺物2 (SK 03)	20
第2図 工事計画と調査区の位置	3	第15図 検出遺構・遺物3 (SK 04・05)	21
第3図 遺跡の位置	5	第16図 検出遺構・遺物4 (SK 06・07)	22
第4図 能瀬南B遺跡と周辺の遺跡	6	第17図 検出遺構・遺物5 (SK 08、P 1・2)	23
第5図 調査区割り、グリッド呼称	8	第18図 検出遺構・遺物6 (SD 01・02)	24
第6図 調査前の地形1 (平面図)	9	第19図 検出遺構・遺物7 (南東斜面1)	25
第7図 調査前の地形2 (エレベーション、地すべり・削平推定範囲)	10	第20図 検出遺構・遺物8 (南東斜面2)	26
第8図 調査区斜面土層断面図	11	第21図 検出遺構・遺物9 (トレーナー、南東斜面遺物1)	27
第9図 調査区全体図	13	第22図 検出遺構・遺物10 (南東斜面遺物2)	28
第10図 調査区平面図1	14	第23図 検出遺構・遺物11 (南東斜面遺物3)	29
第11図 調査区平面図2	15	第24図 検出遺構・遺物12 (南東斜面遺物4)	30
第12図 調査区平面図3	16	第25図 検出遺構・遺物13 (南東斜面遺物5)	31
第13図 検出遺構・遺物1 (SK 01・02)	19		

## 表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表	7	第2表 出土遺物観察表1	32	第3表 出土遺物観察表2	33
--------------	---	--------------	----	--------------	----

## 図版目次

図版1 遺構1	図版5 遺構5	図版8 遺構8	図版11 出土遺物3
図版2 遺構2	図版6 遺構6	図版9 出土遺物1	図版12 出土遺物4
図版3 遺構3	図版7 遺構7	図版10 出土遺物2	図版13 出土遺物5
図版4 遺構4			

# 第1章 調査の経緯と経過

## 第1節 調査の経緯

本書は、地方道改築事業主要地方道高松津幡線(河北継断道路)工事に伴う、能瀬南B遺跡の発掘調査報告書である。能瀬南B遺跡に重複しては7世紀第2四半期の須恵器窯である加茂2号窯が存在し、並行して発掘調査を実施したが、この2号窯については、隣接する加茂遺跡および加茂遺跡に重複する加茂1号窯とあわせ、今後報告することとする。

主要地方道高松津幡線(河北継断道路)は、かほく市免田で国道159号押水バイパスから分岐し、津幡町加茂で国道8号津幡北バイパスに接続する延長13.3kmの道路である。石川県長期構想の一つ「県土ダブルラダー結いの道」整備構想の南北幹線に位置づけられており、金沢市と七尾市を結ぶ国道159号の渋滞緩和や緊急時の代替道路、周辺に立地する工業団地や県立高松病院、レクリエーション施設へのアクセス向上を図り計画された。平成6年度に事業着手し、平成12年度には1期区間の宝達志水町免田～かほく市谷間6.6kmが、平成19年度には2期区間のかほく市谷～上山田間3.3kmが共用されている。

石川県教育委員会事務局文化財課(以下「文化財課」)では毎年、関係部局に対し実施予定事業の内容照会を行い、各事業について埋蔵文化財の保護が図られるよう調整を行っている。上記道路改築事業についても所管の土木部道路建設課と協議しながら、順次、分布調査等により埋蔵文化財包蔵地の有無を確認しており、埋蔵文化財が確認された箇所については、その取り扱いを協議、事業内容を調整するなどし発掘調査等の保護措置を実施してきた。

発掘調査地に接しては、加茂遺跡や能瀬南遺跡などの発掘調査が実施されており、平成20年度の加茂遺跡調査中には遺跡北端の緩斜面において中世の集落下より加茂1号窯が発見された。また、能瀬南B遺跡については、平成20年12月19日に文化財課が実施した分布調査により丘陵上部において弥生時代後期の遺跡として確認された。文化財課は土木部道路建設課に対しこれら調査結果を報告するとともに、埋蔵文化財包蔵地において路線変更等によりその保護が図られるよう設計の見直し等を要請した。以後、文化財課、道路建設課および現地工事を担当する県央土木総合事務所との協議を継続した結果、現状でルート変更是困難であり、工事の実施も急がれることから、当該箇所については事前の発掘調査を行い記録保存することとなった。

冒頭で記したように本書では弥生時代の集落跡である能瀬南B遺跡の調査結果を報告する。このことについて、7世紀前半の須恵器窯である加茂窯跡は平成20年度に1号窯が知られ、これに接した平成23年度の能瀬南B遺跡調査区域にも存在が予想されたが、はたして1号窯の7m上方でさらに1基(加茂2号窯)確認され、平地部の加茂遺跡と丘陵部の能瀬南B遺跡に重複して分布する埋蔵文化財包蔵地「加茂窯跡群」と命名されたものである。遺跡立地から加茂1号窯は加茂遺跡の、2号窯は能瀬南B遺跡の発掘調査の中で一体で発掘されたわけであるが、2号窯は斜面上部にあって地すべりを被り窯奥部の窯床約3mが遺存したのみで、出土須恵器も10点弱とごく少ない。下方に位置した1号窯も地すべりの影響を被ったが遺存は比較的良好で一定量の遺物出土があり、加えて窯の焼成品が加茂遺跡の古墳後期の遺構から出土するなど、窯跡理解には加茂遺跡と一体の報告が不可欠と判断されたことから、本報告では加茂2号窯は概略を記すにとどめ、今後刊行される加茂遺跡の報告書で1号窯と一括して記述することとした。

## 第2節 発掘作業の経過

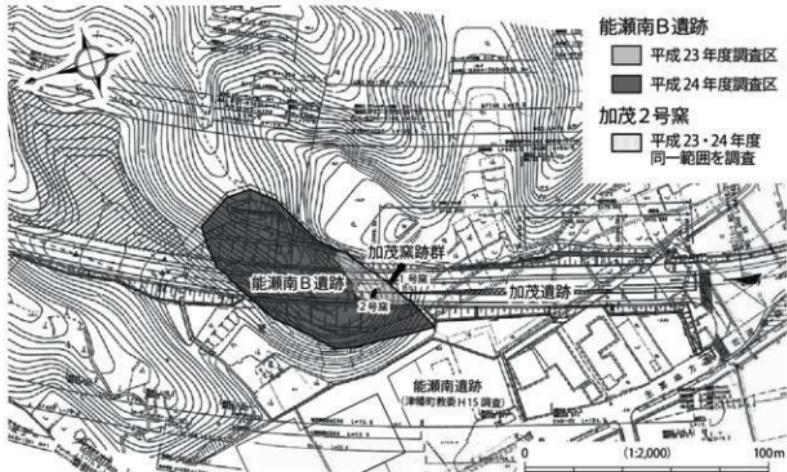
発掘調査は石川県土木部道路建設課からの依頼を受けた県教育委員会の委託事業として、平成23・24年度に財团法人石川県埋蔵文化財センター（以下埋文センター）が実施した。

**平成23年度** 能瀬南B遺跡調査範囲のうち丘陵南側斜面裾部の250m<sup>2</sup>（加茂2号窯範囲100m<sup>2</sup>と重複）を調査対象とし（第2図）、調査部県関係調査グループ布尾和史、荒木麻里子、木原伊織が担当した。発掘調査の実施に際しては県教委と埋文センターとの間で4月1日付けで発掘調査等業務委託契約を締結。また、埋文センターは文化財保護法第92条第1項の規定に基づく発掘調査届（平成23年7月21日付け財埋第275号）を県教委あて提出し、教育長から「発掘調査届に対する通知について」（平成23年7月22日付教文第1218号）を受けた。6月29日に文化財課と埋文センター、7月11日に現地土木工事を主管する県央土木総合事務所と文化財課、埋文センターによる事前の現地協議を行い、道路建設事業計画や調査範囲、ユニットハウス設置場所、駐車場所等を確認した。8月5日に発掘機材搬入および丘陵斜面の下草・小木伐採を始め、8月8日から重機による表土除去実施。幅約40m、高さ約8mの斜面中には、丘陵上部の渡辺家墓所（近世、一帯の十村（他藩の大庄屋に相当）を代々務めた家柄、調査時は丘陵奥に移転済み）から転落あるいは投棄された近世以降の土師器皿や陶器が多数散布しており、これを取り上げながら順次掘り下げていった。調査地は急斜面であり、ロープと安全帶で体を支えながら、厚く堆積する崩落土に難儀しながらも、ところどころで出土する焼土や窯体片に窯跡の存在を期待する中での作業であった。斜面にはトレンチ1～9（第19図）を設定し、土層断面を確認しながら面的掘り下げを行い、8月24日までには大部分を流失しながらも窯体奥部迫りを残す須恵器窯1基（加茂2号窯）を確認した。9月9日には空中写真測量を実施し、12日には文化財課による調査状況確認を受けた。この時点で、調査区外に延びている窯尻部には立木が存在し、地表から高いこともあるって拡張作業は容易ではないことから今年度は窯跡検出段階でとどめ、窯体内部の調査は丘陵上部も対象となる次年度に行うこととなった。9月14日にはシート、土囊により窯体表面を覆い能瀬南B遺跡の調査は終了。9月初めからは加茂遺跡の調査も並行していたが、以後、本格的に加茂遺跡の調査に着手する。

**平成24年度** 加茂2号窯100m<sup>2</sup>を含む、能瀬南B遺跡2820m<sup>2</sup>を調査対象とし、調査部県関係調査グループ澤利明、山 品裕、木原伊織が担当した。4月1日付けで県教委と埋文センターとの間で発掘調査等業務委託契約を締結。埋文センターは文化財保護法第92条第1項の規定に基づく発掘調査届（平成24年4月10日付け財埋第18号）を県教委あて提出し、教育長から「発掘調査届に対する通知について」（平成24年4月10日付教文第148号）を受けた。4月20日に県央土木総合事務所と文化財課、埋文センターおよび立木伐採業者による事前の現地協議を行った。その中では調査地が丘陵先端の山林であること、現地への進入路が南方からに限られること、用地境界が斜面裾、場所によっては斜面中途に位置することなどから、特に立木伐採の方法や調査時の排土置き場などが協議された。立木について、丘陵上部および南側斜面の伐採・搬出は速やかに実施できるものの、北側斜面については大木が多数存在することから重機を用いた作業が必要であるとされ、遺跡損壊を避けるためこの北側斜面の立木伐採は丘陵上部の発掘終了後に実施となった。埋文側でも、丘陵上部・北側斜面の表土除去用重機進入には調査区域を通過せざるを得ず、排土置き場も限られたことから、調査区を1区：南西側斜面、2区：南東側斜面、3区：丘陵上部、4区：北側斜面に分割（第5図）、順次調査実施。調査済み区域を排土置き場とすることとし、調査手順は、1～3区立木伐採→1・2区発掘→3区発掘→



第1図 調査区の位置



第2図 工事計画と調査区の位置

4区立木伐採→4区発掘とした。

調査着手にあたっては、丘陵斜面には須恵器窯が、丘陵上部には弥生時代の墳丘墓の存在が予想されたことから、立木伐採後に調査前の地形測量(第6図)を実施、その後5月7日から1・2区の表土除去を行った。今年度調査区域は昨年度に増して高所・急傾斜地であることから、ネットフェンスと通路を設置し転落防止と足場を確保、斜面では安全帯を着用して作業を行った。2区では斜面の掘削とともに加茂2号窯の発掘を行い、6月8日に1・2区空中写真測量を実施。統いて丘陵上部の3区に着手した。3区の南西半部は渡辺家墓地造営にともない改変され遺構も削平を受けていたが、弥生時代後期の大型土坑や溝が遺存した。また、丘陵部南東側が広範に地すべりを起こしていることが判明したが、その斜面中途で大型土坑2基を確認した。3区は6月21日に空中写真測量を実施した。その後4区の立木伐採・搬出を待って7月5日から表土除去、遺構検出を行った。南東側に比べ緩斜面であったものの路線境界が斜面中途にあったことから堆土を下方へ流すわけにはいかず、猛暑が続くの中その運搬に苦慮した。ただ、尾根上の休憩場所からは、河北潟干拓地にひろがる水田地帯やその先の内灘丘陵が見晴らされ、涼やかな風も絶えず絶好の息抜きとなった。4区では須恵器窯等の遺構は確認されず7月26日に空中写真測量実施。7月30日に県央土木総合事務所に現場を引き渡し、8月3日には発掘機材を搬出し現地調査を終了した。

## ○調査体制

業務内容	発 挖 調 査	発 挖 調 査
調査期間	平成23年11月1日～同年12月21日	平成24年4月10日～同年8月8日
調査主体	(財)石川県埋蔵文化財センター (理事長 竹中 博康)	(公財)石川県埋蔵文化財センター (理事長 木下 公司)
監 検	浜崎 洋(専務理事)	岡田 駿彦(専務理事)
事 務	栗山 正文(事務局長)	栗山 正文(事務局長)
監 稲	浅香 鶴晴(総務グループリーダー)	山口 登(総務G.L.)
経 理	谷内 孝夫(総務グループ主幹)	谷内 孝夫(総務グループ主幹)
三浦 純夫(所長)	三浦 純夫(所長)	三浦 純夫(所長)
調 委	福島 正実(調査部長)	福島 正実(調査部長)
上層 宮嶋(県関係調査グループ主幹)	上層 宮嶋(県関係調査グループリーダー)	上層 宮嶋(県関係調査グループ主幹)
相 当	布尾 和史(県関係調査グループ専門員)	津辺 利明(県関係調査グループ主幹)
荒木 麻理子(県関係調査グループ主任主事)	山 晶裕(県関係調査グループ専門員)	山 晶裕(県関係調査グループ専門員)
木原 伊織(県関係調査グループ嘱託調査員)	木原 伊織(県関係調査グループ嘱託調査員)	木原 伊織(県関係調査グループ嘱託調査員)

## 第3節 整理作業の経過

出土品整理・報告書原稿作成・報告書刊行は事業者から依頼を受けた県教委の委託事業として埋文センターが実施した。担当は県関係調査グループである。出土品整理は平成25年度に実施。内容は遺物の記名・分類・接合・実測・トレスおよび遺構実測図のトレースである。報告書原稿作成は平成26年度に、報告書編集・刊行は平成27年度に実施した。

## ○整理体制

業務内容	出 土 品 整 理	報 告 書 原 稿 作 成	報 告 書 編 集・刊 行
整理期間	平成25年6月24日～同年7月12日	平成26年4月1日～平成27年3月31日	平成27年4月9日～平成28年3月31日
整理主体	(公財)石川県埋蔵文化財センター (理事長 木下 公司)	(公財)石川県埋蔵文化財センター (理事長 木下 公司)	(公財)石川県埋蔵文化財センター (理事長 木下 公司)
監 検	鶴本 定則(専務理事)	小崎 隆司(専務理事)	栗田 政次(専務理事)
事 務	栗山 正文(事務局長)	栗山 正文(事務局長)	釜親 利雄(事務局長)
監 稲	山口 登(総務グループリーダー)	山口 登(総務グループリーダー)	長嶋 誠(総務グループリーダー)
経 理	小松 孝弘(総務グループ主幹)	長嶋 誠(総務グループ主幹)	東 賢吾(総務グループ主幹)
整 理	福島 正実(所長) 藤田 邦康(調査部長) 松山 和彦(県関係調査グループリーダー)	福島 正実(所長) 藤田 邦康(調査部長) 松山 和彦(県関係調査グループリーダー)	福島 正実(所長) 藤田 邦康(調査部長) 松山 和彦(県関係調査グループリーダー)
相 当	調査部県関係調査グループ	調査部県関係調査グループ	調査部県関係調査グループ

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

能瀬南B遺跡は、石川県河北郡津幡町能瀬地内に所在する。石川県は日本列島のほぼ中央に位置し、日本海に突き出た半島域の能登地方と南部の加賀地方に分けられる。津幡町は加賀地方の北部にあって、東西14.2km、南北17.1km、面積約110.5km<sup>2</sup>。町域北部および東部は石川・富山県境に連なる宝達丘陵南部域にあたり、西部、北部は河北潟と金沢平野北端に接する。丘陵地の基盤は新第三紀の泥岩、砂岩、凝灰岩からなり崩壊しやすい地盤であることから、傾斜の割には各所で開析が進んでおり、小谷が樹枝状に入り組み谷底平野が各所で発達している。河北潟は古墳時代には潟湖となったとされ、現在は干拓により北側1/3が残るのみとなったものの、かつては北陸最大の湖沼であった。また、丘陵地と河北潟の間には津幡川や能瀬川をはじめ中小河川により形成された幅2～3kmの沖積低地が広がっている。

津幡の地名は河北潟舟運の停泊地に由来するとされ、越越しに富山につながる街道と河北潟東縁沿いに能登に向かう街道の分岐点として、古代には深見駅が、近世では津幡宿、竹橋宿が置かれた交通の要衝地であり、県境の俱利伽羅岬付近は源平合戦など多くの合戦の舞台となった。

津幡町能瀬は町域の北西部を占める英田地区に属する。おもに能瀬川流域に沿って細長く延びる英田地区の名は、古代の「加賀郡英多郷」、中世の「英田保」を由来とし、明治22(1889)年に舟橋、能瀬、領家、谷内、加茂からなる東英(ひがしあがた)村が発足。同40(1907)年には上流域の種谷村と合併して英田(あがた)村、昭和29(1954)年には津幡町英田地区となっている。能瀬は能瀬川下流域の丘陵裾から河北潟に接する低地にあって、地内を能登街道が通っていた。中世英田南保の内にあり、正平9(1354)年の「後村上天皇論旨(浜津水無瀬神宮文書)」に「能勢」が、天正14(1586)年の「前田利家印判状写(黒津舟神社文書)」には「能瀬村」の地名がみえる。

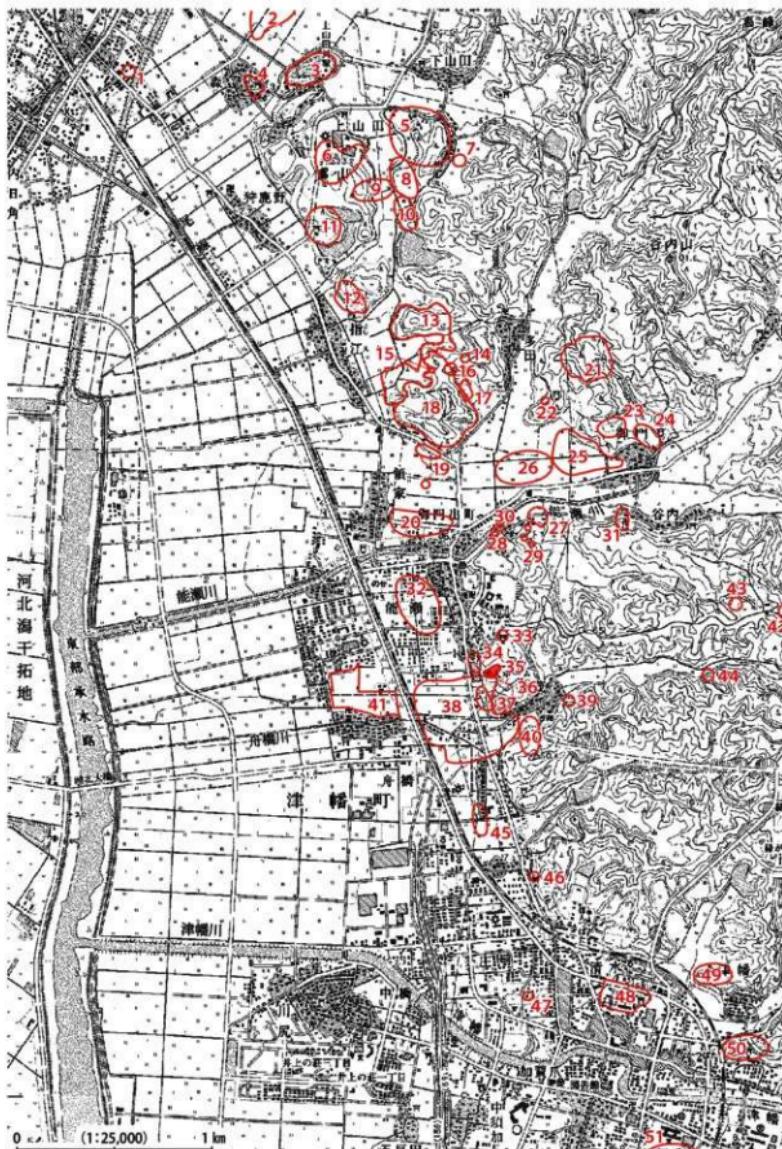
能瀬川と舟橋川の間に位置する低丘陵はその先端で掌状に多方向に尾根を張り出しが、調査地はそのひとつ、最高所標高52m地点から北西に向かい南西に下る長さ200mほどの尾根先端部にあたり、調査区域で標高23～31m、丘陵裾の平地で標高12～15mを測る。尾根上から南方への展望は極めてよく、河北潟干拓地越しに内灘砂丘や金沢平野を見晴らすことができ、北方に向けては、樹高がもう少し低ければ能瀬川流域に展開する能瀬集落や潟縁を能登に向かう能登街道、宝達丘陵が一望されたことであろう。

### 第2節 歴史的環境

調査地周辺において遺跡は丘陵部やその間の谷底平野、丘陵裾から河北潟に面した低地部に多く分布する。以下概観すると、町内において旧石器時代の遺跡は現在のところ確認されていない。縄文時代では丘陵奥部で中期の刈安・上野堂畠遺跡や相窪遺跡、竹橋油木谷遺跡が、河北潟を望む丘陵上で中期中葉の上山田貝塚(3、国指定史跡)や落とし穴が検出された谷内石山遺跡(27)がある。後期以



第3図 遺跡の位置



第4図 能瀬南B遺跡と周辺の遺跡

降では丘陵奥で能瀬クサヤマA遺跡(42)、能瀬クサヤマB遺跡(43)、丘陵裾部で指江遺跡(12)、指江B遺跡(13)のはか、加茂遺跡(38)では中期～晚期の谷川を検出し杭列や木組み遺構、晚期の貯蔵穴を確認している。弥生時代では、前・中期は希薄である。その中で加茂遺跡で前期末～中期の平地式建物や土坑、水場遺構、水田などを確認した。舟橋川流域に位置する加茂遺跡では最大で6面の生活面を確認しており、調査地周辺の低地部にはさらに遺跡が埋没している可能性がある。続く後期～古墳時代前期にかけては多くの遺跡が営まれる。かほく市の鉢伏茶臼山遺跡では高地性集落が確認され、上山田遺跡、加茂A遺跡(37)、加賀爪遺跡(51)のはか、指江ジユウサンザカ遺跡(16)では標高約45mの丘陵頂部で後期後葉の堅穴建物2棟や土坑、区画溝が、谷内石山遺跡でも標高約30mの尾根先端部で堅穴建物4棟や環濠が確認されている。古墳時代では能瀬川流域の丘陵部で多数の古墳・横穴墓群が形成される。発掘例は少なく内容不詳のものが多いが、右岸では4世紀代とみられる御門A古墳群(23)、方墳からなる御門B古墳群(24)、時期は確定されていないが多田西ヶ峰横穴(22)が、左岸では谷内石山古墳群(29)、能瀬石山古墳群(30)、谷内横穴群(31)などがある。指江古墳(15)は直径12mの単独墳である。また、近年、須恵器窯が相次いで発見された。加茂窯跡群(36)では能瀬南B遺跡の立地する丘陵斜面で7世紀第2四半期頃の須恵器窯2基が、その1.4km北に位置する多田ツルガタン遺跡(17)では窯体は未発見だが、溶着したりゆがみの大きい窯からの流出品とみられる7世紀第2～第3四半期ごろの須恵器片が多数出土した。これら須恵器窯の成立には、古墳時代後期から平安時代にかけて盛期を持つ加茂遺跡(国指定史跡)、掘立柱建物群、北陸道、運河とみられる大溝、加賀郡勝示札などを検出、古代の官衙跡とされる)や隣接する能瀬南遺跡(34)、指江B遺跡(地方豪族の拠点とされ、多数の墨書き器や木製品、祭祀関連遺物が出土)などの関与が大きいと推測されるものである。また古代では領家指江ハシバ遺跡(19)、加茂遺跡と重複する加茂庵寺遺跡(38)のほか能登に向かう街道沿いに多くの遺跡が形成され、加茂遺跡、指江遺跡(12)、指江B遺跡、領家遺跡(20)、御門遺跡(25)、御門ジャモチ遺跡(26)、能瀬南遺跡、五月田遺跡(45)などは中世まで継続する。中世では森城跡(4)、上山田城跡(5)、多田城跡(21)、津幡城跡(48)などの中世城館や英田弘濟寺跡(18)、多田中世塚(14)が築かれる。また、近年、津幡の市街地では源平合戦で木曾義仲軍に加わった有力者、津波田氏の居館跡とみられる清水遺跡(47)が調査され、街道沿いの要衝地としてあった津幡周辺の状況が明らかとなってきた。

遺跡名	所在地	時代	種別	遺跡名	所在地	時代	種別
1 美子田遺跡	かほく市美子田	新石器時代	集落	25 御門垂跡	津幡町御門	古代、中世	散布地
2 箱ヶ谷ココロ遺跡	かほく市森	古代	集落	26 御門二ヤモチ遺跡	津幡町御門	古代、中世	散布地
3 上山田城跡	かほく市上山田	礎文	城郭	27 谷内石山遺跡	津幡町谷内	真夏、秋、冬	古墳
4 森城跡	かほく市森	中世	城郭	28 亂闘山イヤマ遺跡	津幡町伊豆原	礎文	散布地
5 上山田城跡	かほく市上山田	中世	城郭	29 谷内石山古墳群	津幡町谷内	古墳	古墳
6 上山田古石遺跡	かほく市上山田	弥生、古墳	集落	30 亂闘山古墳	津幡町伊豆原	古墳	古墳
7 上山田田原遺跡	かほく市上山田	中世	散布地	31 谷内石穴群	津幡町谷内	古墳	稍古墓
8 上山田田原遺跡	かほく市上山田	古墳	散布地	32 亂闘山遺跡	津幡町伊豆原	真夏～古墳	散布地
9 上山田跡	かほく市上山田	古墳	散布地	33 亂闘山古墳	津幡町美濃湖	中世	散布地
10 指江人堤北遺跡	かほく市指江	弥生	散布地	34 亂闘山遺跡	津幡町伊豆原	古墳～中世	集落
11 野鹿野ノ森神社裏遺跡	かほく市野鹿野	古墳	散布地	35 能瀬南B遺跡	津幡町能瀬	弥生	集落
12 指江遺跡	かほく市指江	古代	散布地	36 加茂西ヶ谷群	津幡町加茂・吐瀬	古墳	生糸遺跡
13 指江B道跡	かほく市指江	礎文～中世	散布地	37 加茂人跡	津幡町加茂	弥生、古墳	集落
14 多田中世塚	かほく市多田	中世	塚	38 加茂北跡、加茂庵寺遺跡	津幡町加茂・舟倉・能瀬	弥生～中世	集落、寺院跡
15 指江古墳	かほく市指江	古墳	古墳	39 加茂明神遺跡	津幡町加茂	古墳	散布地
16 指江ジユウサンザカ遺跡	かほく市指江	弥生	集落	40 加茂ニタグラ遺跡	津幡町加茂	古墳	集落
17 多田フルガタン遺跡	かほく市多田	古墳、中世	散布地、集落	41 加茂ヒャッカハナヒュウワリ遺跡	津幡町加茂	弥生	集落
18 英田広清寺跡	かほく市多田	中世	社寺	42 能瀬ラウヤマ人遺跡	津幡町能瀬	礎文	散布地
19 領家指江ハシバ遺跡	津幡町領家	古代、中世	散布地	43 能瀬ラウヤマ古墳跡	津幡町能瀬	真夏、古墳	散布地
20 領家遺跡	津幡町領家	古代、中世	散布地	44 加茂英吉遺跡	津幡町能瀬	古墳	散布地
21 多田城跡	かほく市多田	中世	城郭	45 五郎山遺跡	津幡町五郎山	古代、中世	散布地
22 多田西ヶ峰痕穴	かほく市多田	古墳	堆積穴	46 住吉山神社遺跡	津幡町五郎山	弥生	散布地
23 朝門A古墳群	津幡町御門	古墳	古墳	47 清木道跡	津幡町清水町	弥生、中世	集落
24 朝門B古墳群	津幡町御門	古墳	古墳	48 津幡城跡	津幡町清水	中世、近世	城郭
				49 津幡ラウヤマ古墳跡	津幡町津幡	古墳	散布地
				50 津幡遺跡	津幡町津幡	古墳	散布地
				51 加賀爪遺跡	津幡町加賀爪	古墳	散布地

第1表 周辺の遺跡一覧表

# 第3章 調査の結果

## 第1節 概要

### 1 概要(第9図)

調査区域は幅約40m、延長約100mの丘陵先端部全域である。調査の結果、丘陵尾根上部(3区)と南東側斜面上部(2区東半部上部)で弥生時代後期後葉～終末期の大型円筒形土坑3基、小型土坑4基、区画状の溝2条を、丘陵先端部の南東側斜面中ほど(2区西半部)では7世紀後半期頃の須恵器窯(加茂2号窯)1基を確認した。遺物はコンテナにして1箱の弥生土器と数点の須恵器片や窓体片、中世土師器片が出土した。調査前には、尾根上部では弥生墳丘墓が、緩傾斜をなす北西側斜面(4区)では須恵器窯の存在が予想されたが遺構・遺物は確認されなかつた。また、調査前、丘陵先端上部の延長約30mには渡辺家累代の墓所が置かれており、その造営の中で平坦地化されていた。なお、能瀬村に居をおき、近世において十数カ村を束ねた十村(他藩の大庄屋に相当)役を代々勤めた渡辺家は、河北郡十村中でも筆頭の家柄であった。その墓所は調査時には丘陵奥に移転・改葬されていたが、一部、近世の所産とみられる墓坑下部が残っており、これらについてはトレント調査により遺構の重複の有無等を確認した。また、墓所にともなう片付け穴1基(S K 02)を検出したほか、南東側斜面表土中に墓所から投棄あるいは転落したとみられる近世以降の土師器皿や香炉、花瓶などの陶磁器製供献具、墓所に置かれた小屋の瓦などコンテナにして7箱が出土している。

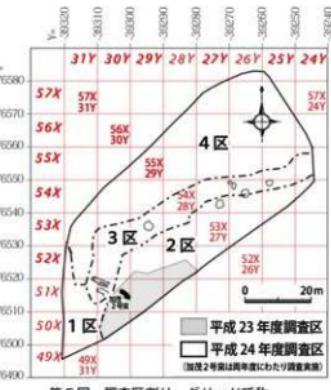
### 2 調査区割り(第5図)

調査原因となった道路改築事業にかかるては、能瀬南B遺跡の南側に位置する加茂遺跡において平成17年度より発掘が着手され、平成23年度までの7カ年にわたり継続実施されている。これに続く能瀬南B遺跡の調査に際しては、同様に調査区全体に平面直角座標第VII系(世界測地系)に合わせた一辺10mのグリッドをかけ、グリッド呼称は加茂遺跡と一連のものとした。その基点は南東隅にあり、呼称は東西帶をX、南北帶はYとし、基点グリッド「1 X 1 Y」からそれぞれ10m毎に1ずつ増加させたものである。能瀬南B遺跡は49 X 30 Y区～58 X 27 Y区までが調査区域にかかる。

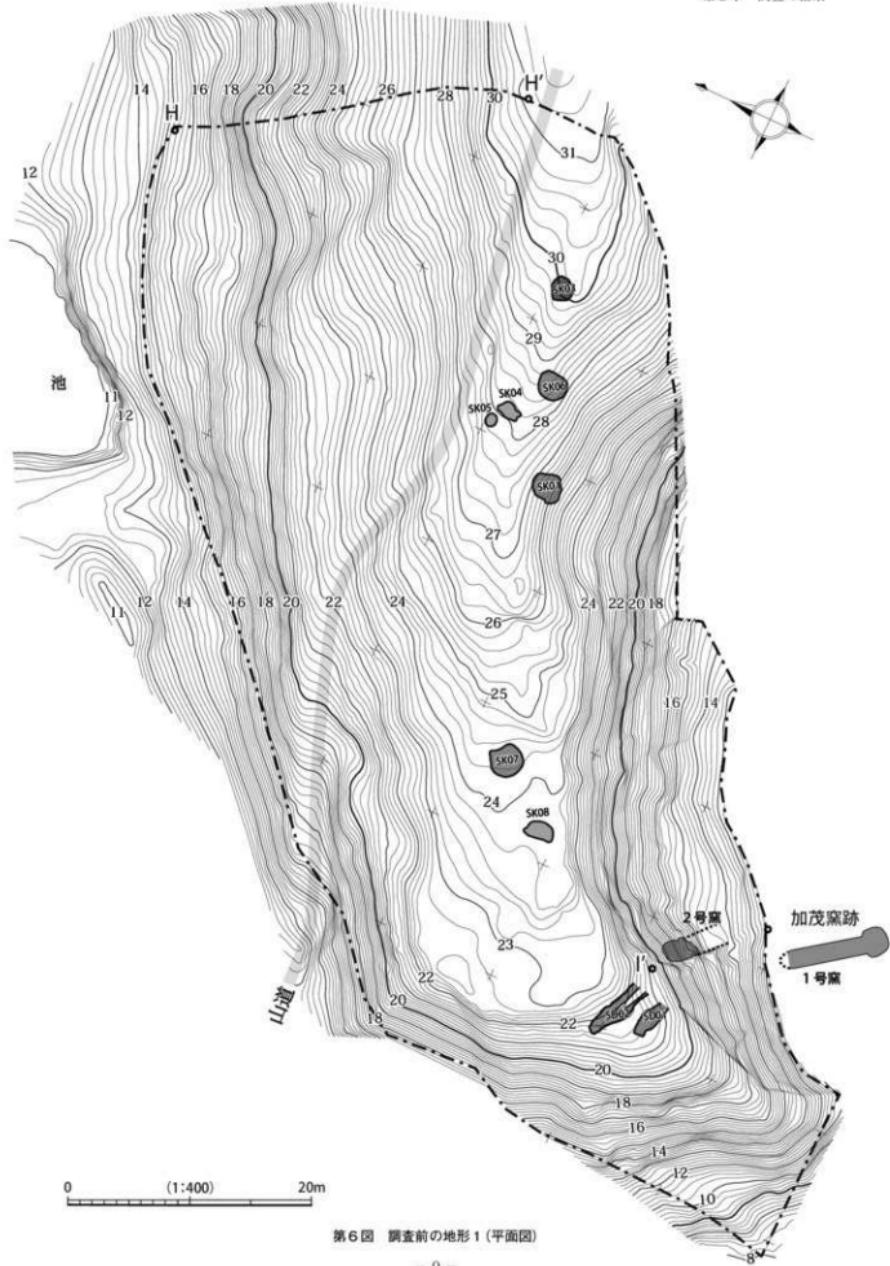
また、第1章第2節で記したように、丘陵上の立木伐採・搬出経路や発掘排土置き場の確保等のため調査区は大きく、1区:南西斜面、2区:南東斜面、3区:丘陵上部、4区:北側斜面に大別し1区から順に調査を進めた。

### 3 調査地の地形と堆積土壤(第6～8・19・20図)

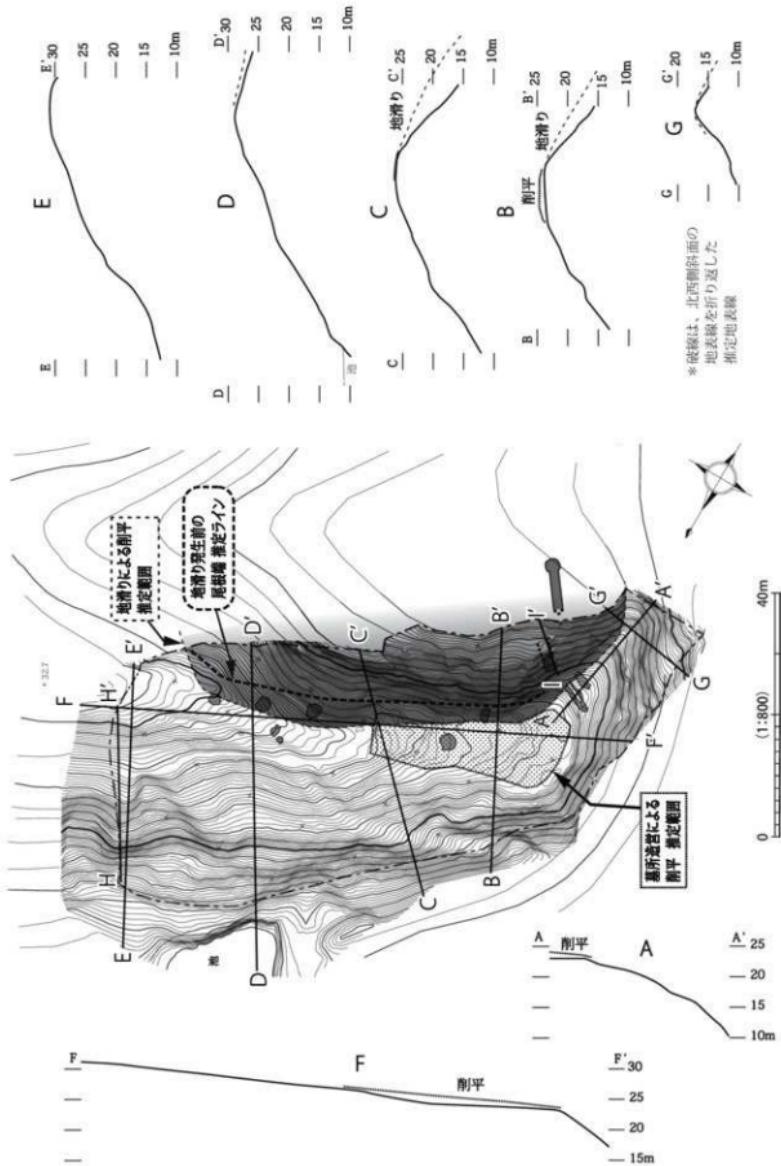
調査対象となった丘陵は北東から南西に緩く下り、尾根上部幅6～10m、調査区域で標高23～31m、



第5図 調査区割り、グリッド呼称



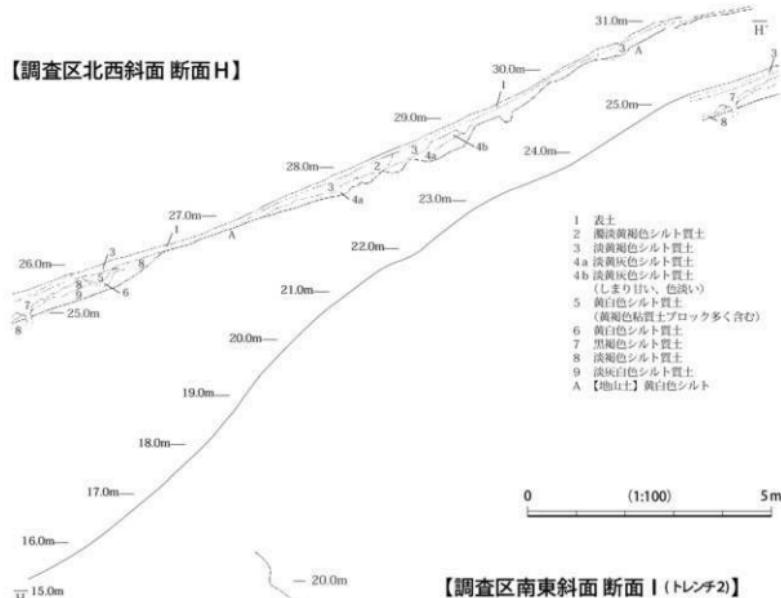
第6図 調査前の地形1(平面図)



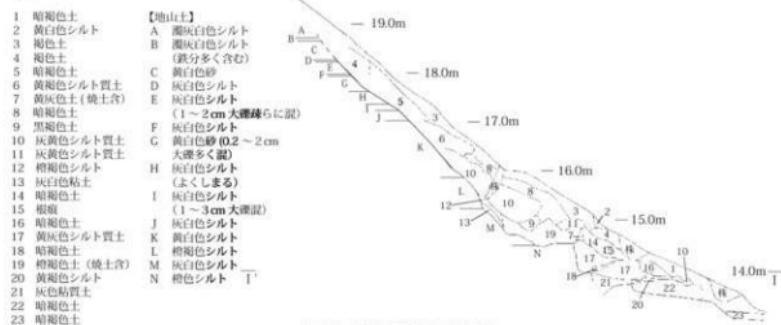
第7図 調査前の地形2(エレベーション、地すべり・削平推定範囲)

平地との比高差11～16mを測る。調査前において南西半部は墓所、ほかは山林であり、北西斜面には尾根上の墓地や尾根奥に至る幅2m程の山道が通っていた。各所の地形をみると、尾根先端上部(第7図断面Cラインより南西側)は墓所が営まれる過程で幅10mほどの平坦面が削り出されており、比較的旧状を残す北東部の尾根形状からみて本来は0.5～1m程度高かったとみられる。斜面部について、北西側斜面(第7図、第8図断面H)は裾部が崩落により急傾斜をなすほかは、傾斜約25度で下り比較的旧地形を残すとみられる。その中で調査区北端の斜面下半において幅約10mのU字形凹み(断面Hラインがかかる箇所)が認められた。ここに須恵器窯を予想したが、結果的に遺構は存在せず部分的な斜面崩落跡と判断された。この北西側斜面の堆積土(第8図断面H)は全般に10～30cmと薄く、地

### 【調査区北西斜面 断面H】



### 【調査区南東斜面 断面I (トレンチ2)】



第8図 調査区斜面土層断面図

山土：A層(黄白色シルト)と表土：1層間の堆積土2～6・8・9層(明色のシルト質土)の多くは斜面上部からの流出土砂、黒褐色シルトの7層は再堆積した旧表土とみられる。

これに対し南東側斜面(第8・19・20図)は急傾斜をなし、地表で傾斜40～48度を、地山面ではいずれも45度前後を測る。第20図トレント1(断面C)では地表の傾斜が27度と緩いが、これは斜面上部からの滑落土が2mあまり堆積していることによるものである。第19・20図の各トレント断面で地山層上面のラインをみると、斜面中腹の標高14～16mに犬走り状に平坦面(トレント1で幅約1m)があり、その上の覆土各層は下から重ねたように、比較的水平に近い堆積をなす。南東側斜面の急崖地形や土壤堆積状況からは、犬走り状の平坦面を地すべり面として、その辺りの地山層が抜けることで斜面全幅に及ぶ大規模な地すべりが発生した状況が推定される。また、地山土について須恵器窯脇に設定した第8図断面Iでみると、A～N層の砂、礫を含んだシルト、シルトなど軟質、硬質の土壤が高さ5mほどの間にこまかく互層をなし堆積する状況が認められた。調査中にみた雨天時の表土流出の激しさや、道路工事時の丘陵切り通し断面写真(図版8右下)などからも、遺跡ののる丘陵が脆く崩れやすい土壤からなることが知られたが、第2章で記述した調査地周辺の丘陵地盤の軟弱さがうかがわれ、加茂遺跡における最大6面もの生活面累重の背景を垣間見させるものがある。

## 第2節 検出遺構・遺物

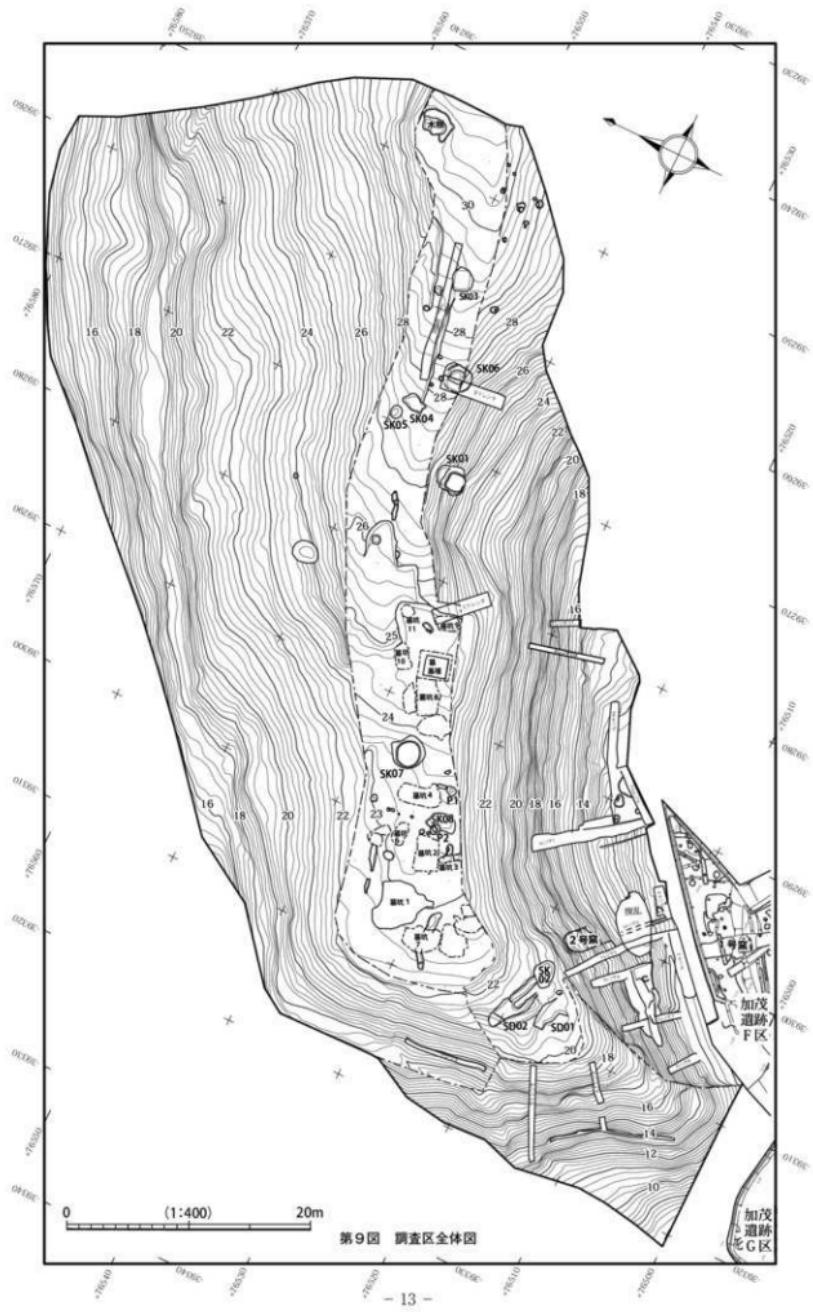
### 1 土 坑

**S K 01**(第9・11・13図) 2区東部で、3区に接する傾斜50度の斜面上部で検出された。地すべりにより南半を斜めに流失している。本来は尾根上の平坦面に位置した土坑であろう。断面逆台形を呈し、上縁で長径239cm、短径223cm、深さ190cmを測る大型円筒形土坑である。現状の尾根上から約70cm下がった場所に上縁があり、本来の深さは260cm以上であろう。平坦な底面は隅丸長方形を呈し、長径165cm、短径131cm、周縁に幅20cm前後、深さ6～10cmの壁溝を設ける。覆土は深さの割に単純でしまりの甘い各層が水平堆積をなし、短期に埋没あるいは人為的に埋め戻された可能性がある。底面上には開口時に堆積したかとみられる暗色の6層(淡褐色シルト、厚さ約6cm)が堆積する。底面に近い5層を主に弥生時代後期後葉～終末期の土器細片が約40点出土しており、第13図1の蓋、2の高杯脚裾部を図化した。

**S K 02**(第9・10・13図) 3区南西端、尾根上から南に下る斜面上部に位置しS D 02を切る。不整梢円形を呈し、長径229cm、短径163cm、深さ88cmを測る。渡辺家墓所脇に設けられた片付け穴であり、土師器皿(3～8)、骨壺、骨壺蓋(9)、平瓦(10)などが出土している。穴に重複して立木がありその年輪が30本程度を数えたことから、30年前以前の所産といえよう。

**S K 03**(第9・12・14図) 3区東部の尾根上に位置する。平面隅丸長方形を呈し、上縁で長径196cm、短径166cm、深さ58cmを測る。断面は逆台形を呈する小形土坑である。覆土は2層→3層→1層と土坑縁側から埋没した様相を示す。規模の割に遺物量は多く11～14に示した。11は壺口縁部。12は壺胴下半部で最大径33cmを測る。13の高杯脚部には5個の、14の高杯脚裾部には2個の円孔を穿つ。14の内面外周に沿って煤が付着する。いずれも弥生時代後期後葉の所産とみられる。

**S K 04**(第9・12・15図) 3区東部の尾根上に位置する小型土坑。北西にS K 05が接する。南北に長い不整平面形をなし。長径197cm、短径117cm、深さ30cmを測る。断面は逆台形を呈する。比較的多くの土器が主に1層から出土しており、15～25に示した。23の高杯は脚裾部周縁を赤彩する。いずれも弥生時代後期後葉の所産とみられる。



第9図 調査区全体図

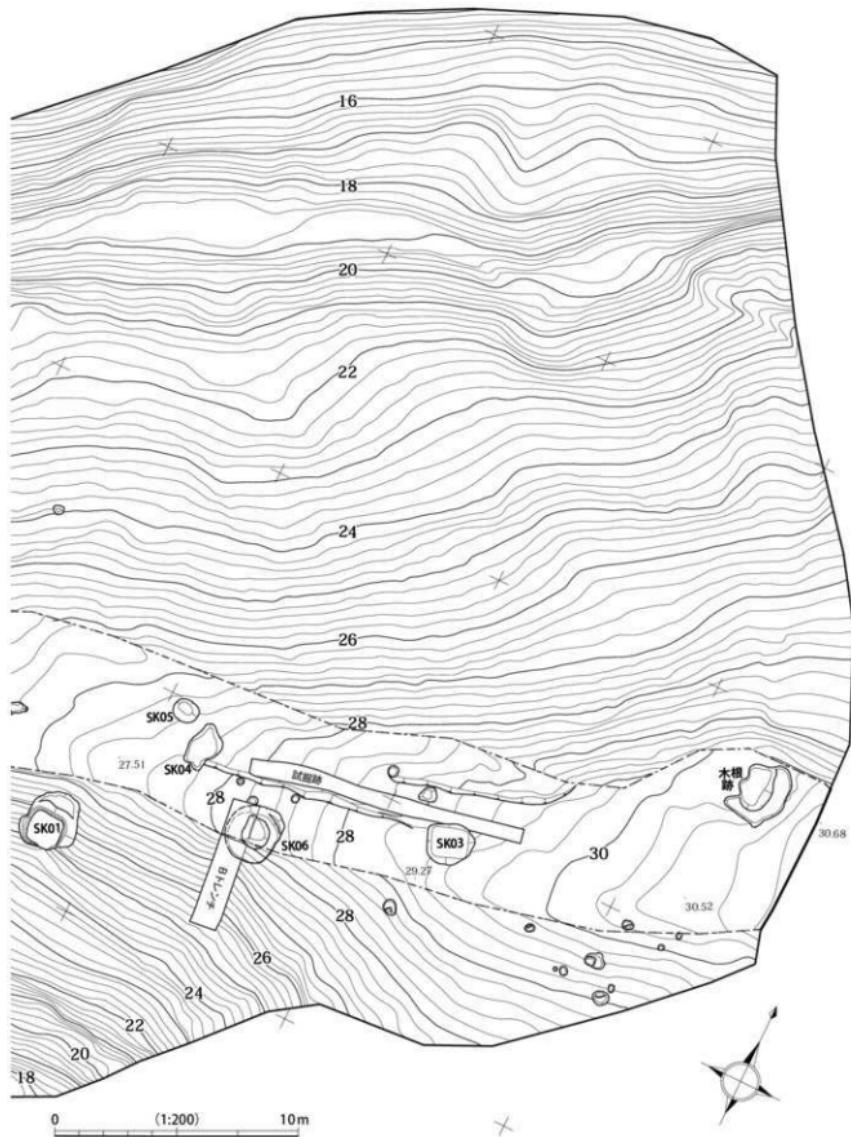
【平面図 図葉割】



第10図 調査区平面図 1



第11図 調査区平面図2



第12図 調査区平面図3

**S K 05(第9・12・15図)** 3区東部の尾根上に位置する小型土坑。南東にS K 04が接する。平面長円形を呈し、長径103cm、短径90cm、深さ26cmを測る。断面楕形を呈する。出土遺物はない。

**S K 06(第9・12・16図)** 3区東部の尾根上に位置し、南半が2区斜面にかかり斜めに削られる。平面やや不整な円形を呈し、長径246cm、短径220cm、深さ163cmを測る。S K 01・07と同じく大型円筒形土坑であるが、底面中央が窪み、壁溝は設けない。断面形は上部が外開きし、下部は円筒形をなし部分的に外膨れする。土坑縁から埋没していったとみられ、下半の覆土は地山土ブロックを含む土壤が多く人為的に埋め戻された可能性が考慮される。出土遺物はない。

**S K 07(第9・11・16図)** 3区西部中程の尾根上に位置する。直径260cm前後のやや不整な円形を呈し、深さ130cmを測る大型円筒形土坑である。墓所の中に位置し、上面が50~100cm程度削平されている可能性がある。壁面はわずかに外傾しながら立ち上がり、オーバーハンプする箇所もある。平坦な底面周縁に幅15~30cm、深さ15cm前後の壁溝を設ける。覆土は深さの割に単純でしまりはやや甘く、短期に埋没あるいは人為的に埋め戻された可能性がある。遺物は土器細片が約20点出土しており、26の壺、27の壺胴部を図化した。弥生時代後期後葉の所産とみられる。

**S K 08(第9・11・17図)** 3区東部南側に位置する小型土坑。平面不整長円形、断面逆台形を呈し、長径230cm、短径138cm、深さ50cmを測る。28・29の弥生時代後期後葉とみられる壺、高杯が出土している。

## 2 溝

**S D 01(第9・10・18図)** 3区南端、尾根上部から斜面を約5m下った傾斜14度の場所に存在する。等高線に平行し尾根を横断する形で位置することから、尾根上と下を境する区画溝の可能性がある。長さ280cm以上、幅132cm、深さ60cmを測る。溝の南東側延長は地すべりにより削平される。北西側延長も急崖となっており地すべりを被ったとみられるが、周辺地形からみてそう伸びずに途切れていった可能性がある。遺物は伴わざ時期は決定できないが、北東1mに並走するS D 02と関連が考えられる。

**S D 02(第9・10・18図)** S D 01の北東側にあって、尾根上部から斜面を約3m下ったより高い場所に並走する。長さ500cm以上、幅150cm、南東部が二分しており、斜面上位のS D 02 aは幅66cm、深さ60cmと深く、下位のS D 02 bは幅58cm、深さ16cmと浅い。S D 02 bの南東側はS K 02に削られ、その先は地すべりによって削平される。北西側延長もS D 01と同じく状況は不明である。S D 02 aからは弥生時代後期後葉の34の壺、35の台付鉢のほか土器細片約20点が出土している。

## 3 南東側斜面(2区)

第19・20図には2区にあたる調査区南東側斜面に設定したトレンチ配置図とその断面土層図を、第21~25図には斜面からの出土遺物を示した。遺物は表土から手掘りで堀り下げた平成23年度調査時に地表で採取あるいは斜面覆土中から出土したものである。38~41、47~51の須恵器は7世紀第2四半期に位置付けられ、加茂2号窯に伴うものであろう。43は打製石斧、36、37、45、46は弥生土器、52~71は近世以降の土器器皿である。合計80枚程が出土しており、多くが灯明皿として使用されている。渡辺家は真宗であり供養の際に用いられたものであろう。その法量は①:口径7~7.5cm、器高1.5~2cm、②:口径9~10cm、器高2~2.5cm、③:口径11~12cm、器高2~2.5cmの3法量に大まかに分けられる。72~74は陶器皿、75~96は骨壺、76はすり鉢、77は德利、78~88、90~91は磁器皿・碗・鉢、89は香炉、92は仏飯器、93・94は花瓶である。これら斜面出土遺物は尾根上の弥生集落や墓所から転落したもので、多量に存在した土器器皿などには折々の片づけ等に際し投棄されたものも多いであろう。44の繩文土器も斜面上部で出土しており尾根上からもたらされたとみられる。97~102

の釉薬瓦はSK02出土品と同じく墓所脇に設置された小屋等に伴うものであろう。

### 第3節 ま と め

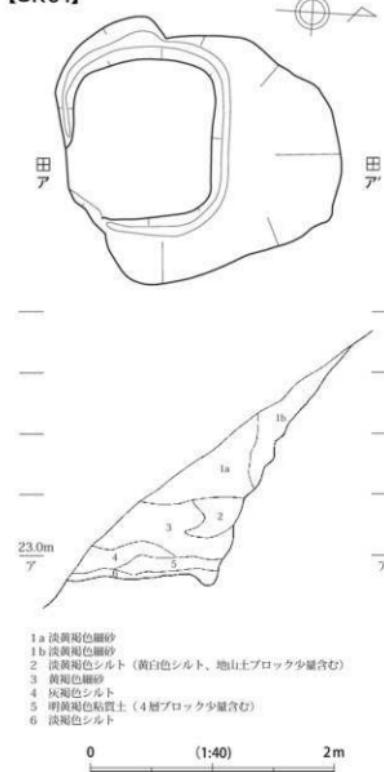
調査の結果、旧河北潟を見晴らす標高23～31m(平地との比高差11～16m)の丘陵尾根上に立地する弥生時代後期後葉～終末期の集落跡を確認した。検出遺構(第9図)は、尾根上～南東側斜面で大型の円筒土坑3基(SK01・06・07)、小型の土坑4基(SK03～05・08)、尾根先端部斜面で尾根に直行する区画状の溝2条(SD01・02)である。南東側斜面ではほかに古墳時代後期の須恵器窯1基(加茂2号窯)を調査したが、これについては、今後刊行予定の『加茂遺跡』報告書に掲載する。

また、遺跡の立地する丘陵について自然・人為により大幅な改変を受けていた(第7図)ことを確認した。そのひとつは丘陵南東側で認められた地すべりである。一時のものか複数回にわたるものかは不明だが、結果的に尾根上部南側と延長約80mの南東斜面全幅を滑落させる大規模な自然災害であり、ここに位置した大型土坑SK01・06は急崖上部で斜めに削られた状態で検出され、斜面中途に築かれた加茂2号窯は窯尻部床面3mを残すのみの状態であった。尾根上部の平坦面は現状で幅6～10mであるが、周辺の地形を考慮すると、地すべり発生以前にはさらに5m程度幅が広かったものと推定される。また、区画状溝が横断する尾根先端部斜面も特に西側が急崖なし斜面滑落があった可能性が高い。もうひとつの地形改変は尾根先端部上面においてであり、先端から約30m間が近世以降の墓所造営に伴い平坦地化されていた。削平度合いは把握できなかったが周辺地形からみて0.5～1m程度の厚さで削られたものと推定する。

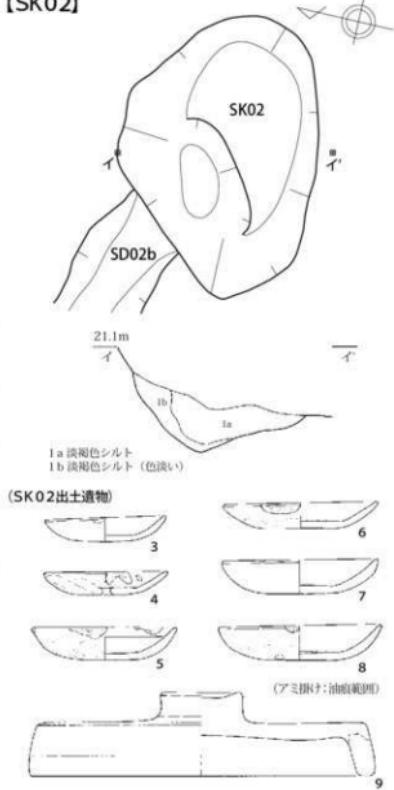
さて、本遺跡並行期において、加賀地域北部の標高20～60mの低丘陵上から丘陵裾の低地部では多数の遺跡が知られるが、その中には遺跡立地や検出遺構からみて、単に台地や丘陵上を占地した一般集落とはできない内容を持つ遺跡が認められる。調査地周辺では、能瀬南B遺跡の北方約4kmにおいて、環濠や土壘状遺構などの防衛遺構をともないその内外で15棟の竪穴建物や大型土坑を確認した、北陸を代表する高地性集落、鉢伏茶臼山遺跡がある。隣接する低丘陵上の鉢伏カクチ遺跡では、茶臼山に向いた標高約25m(平地との比高差約15m)地点で竪穴建物1基、大型土坑3基、区画溝が、北方約0.8kmに位置する谷内石山遺跡では、能瀬川流域を望む標高約27m(平地との比高差約20m)の尾根先端で塹や4棟の竪穴建物が確認されている。また、北方約1.5kmに位置する指江ジュウサンザカ遺跡は、標高約55mの丘陵頂部から少し下った標高45m(平地との比高差約35m)地点の約10×20mの高まり上で、建て替えを伴う竪穴建物1棟と円筒土坑1基が確認されている。能瀬南B遺跡での弥生期の営みは、上述の地すべりや削平により調査区各所が旧状を失った状況にあって十分に復元し得ないが、検出した土坑や溝からは細片ながら各10数点の土器が出土しており、一定規模の活動があったことがうかがわれる。その中心としては比較的幅を持つ尾根先端部、墓所に重なるSK07周辺が想定され、削平を被った竪穴建物の存在も考えうる。ただ、最大に見積もっても幅15m程度の瘦せ尾根上であり同時存在はせいぜい2・3棟であろう。こうした想定において、先に挙げた遺跡のなかでは、開けた眺望と外部から独立した小規模な遺構構成をもつという点において谷内石山遺跡や指江ジュウサンザカ遺跡に本遺跡との類似性をうかがう。資料の増加に期待したいが、眼下の加茂遺跡では平地式建物や掘立柱建物を伴う同時期の集落が確認されていることからみて、能瀬南B遺跡の検出遺構については、恒常的集落ではなく、加茂集落を拠点としこれに付随する施設群であり、その性格としては、高所からの監視あるいは周辺集落との通信的性格を担った可能性を指摘しておきたい。

最後に、丘陵南東側の地すべりの発生時期についてみてみたい。丘陵南側の低地部では弥生時代か

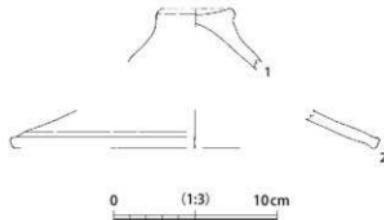
【SK01】



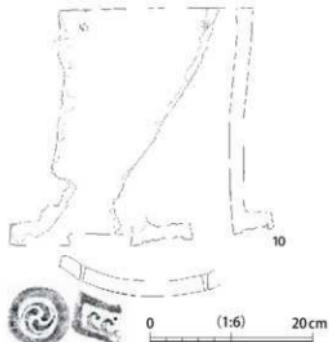
【SK02】



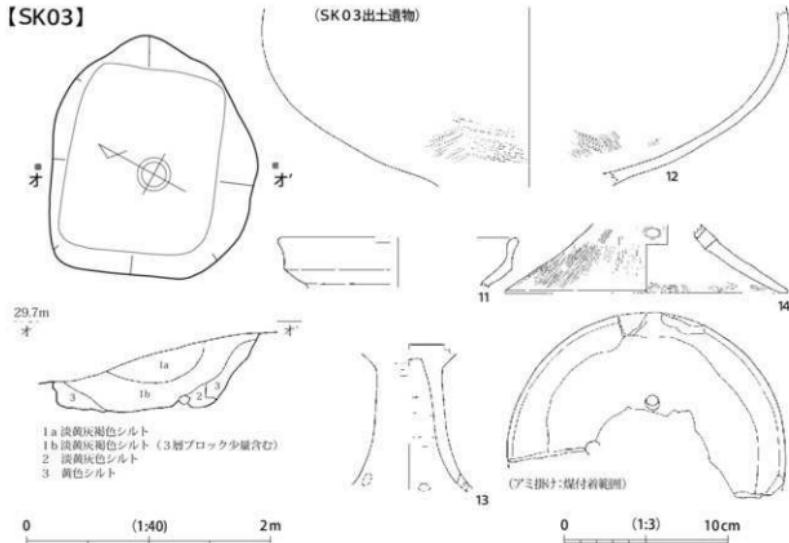
(SK01出土遺物)



(縮尺 遺構 1/40, 遺物 1~9:1/3, 10:1/6)



第13図 掘出遺構・遺物 1 (SK01・02)



第14図 検出遺構・遺物2 (SK03) (縮尺 遺構 1/40、遺物 1/3)

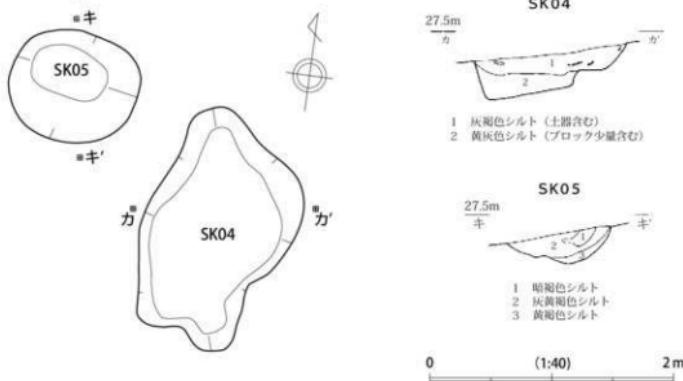
ら中世まではほぼ連続と加茂遺跡(第2図)が営まれる。その中で、能瀬南B遺跡に接する丘陵南裾から約40m間(加茂遺跡F・G区(第9図右下))においては、7世紀後半期の須恵器窯(加茂1号窯)操業の後、13世紀代に地すべり土を整地した上に掘立柱建物が設けられるまで活動は希薄となる。一方、丘陵西裾に接し加茂遺跡と継続時期を同じくする能瀬南遺跡ではその間においても遺構が継続する。加茂遺跡F・G区の停滞の背景には地すべりの影響が想定されるものであり、その発生時期については早ければ7世紀後半、遅くとも古代の間を推定したい。広範囲に調査が実施された加茂遺跡では縄文時代以降、最大6面の生活面が確認されており、その概報でも指摘されている(安2007)が、当地においては河川による土砂流入とともに、周囲の丘陵部からの流出土砂も生活面累重の要因として留意されよう。特に、能瀬南B遺跡の地すべりは非常に大規模な自然災害であり、古代加茂遺跡の運営に少なからぬ影響を与えたと思われる。流出した加茂窯の窯体や須恵器などは加茂遺跡の発掘調査ではあまり確認されていないが、その残骸は調査区域外に流出したほか、加茂遺跡の古代・中世あるいはその後の営みの過程で片付けられた可能性がある。

## 参考文献

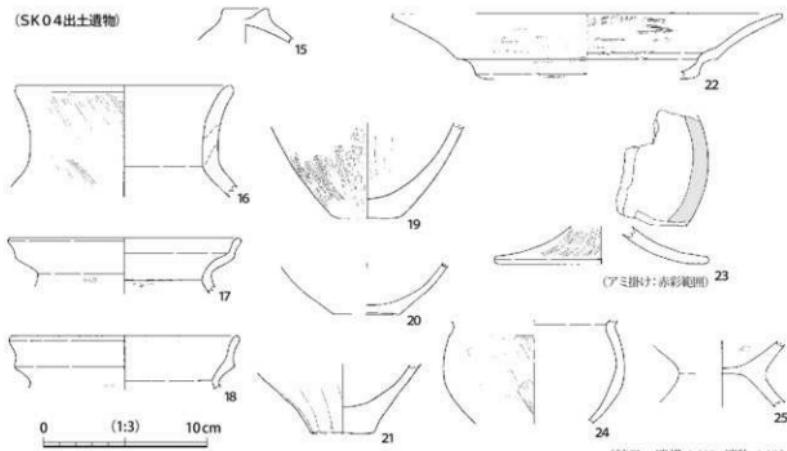
- 宇ノ気町史編纂委員会 1970 「石川県宇ノ気町史」 宇ノ気町教育委員会  
 津幡町史編纂委員会 1974 「津幡町史」 津幡町役場  
 前野義夫 1977 「石川県の自然環境」 石川県  
 西野秀和,他 1980 「津幡町谷内石山道路」 津幡町教育委員会  
 角川日本地名大辞典編纂委員会 1981 「角川地名大辞典」 17 石川県 鹿角川書店  
 橋本澄夫 1987 「第5章第3節 加賀・能登における高地性集落遺跡とその時期」 「宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡」 石川県河北郡  
 宇ノ気町教育委員会

- 米沢義光ほか 1987 「宇ノ気町鉢伏茶臼山遺跡」 石川県河北郡宇ノ気町教育委員会  
 (有) 平凡社地方資料センター 1991 「石川県の地名」 日本歴史地名大系第 17 卷 株式会社平凡社  
 三浦純夫(著) 1993 「加茂遺跡」 (社) 石川県埋蔵文化財保存協会  
 西野秀和 1999 「第 7 章 考察」 「能美丘陵東遺跡群 V」 (財) 石川県埋蔵文化財センター  
 萩田昌治 2004 「高適性集落と山住みの集落」 「考古資料大観」 第 10 卷 弥生・古墳時代 遺跡・遺構 小学館  
 安 英樹 2007 「加茂遺跡」 「石川県埋蔵文化財情報」 第 18 号 (財) 石川県立埋蔵文化財センター  
 林 大智 2008 「かほく市 鉢伏カクチ遺跡」 (財) 石川県立埋蔵文化財センター  
 津幡町教育委員会 2008 「能瀬山遺跡」 発掘説明会資料  
 戸谷邦隆(著) 2009 「加茂・加茂庵寺遺跡」 津幡町教育委員会  
 浜崎悟司(著) 2009 「津幡町 加茂遺跡」 石川県教育委員会・(財) 石川県埋蔵文化財センター  
 戸谷邦隆(著) 2012 「加茂遺跡」 津幡町教育委員会

## [SK04・05]

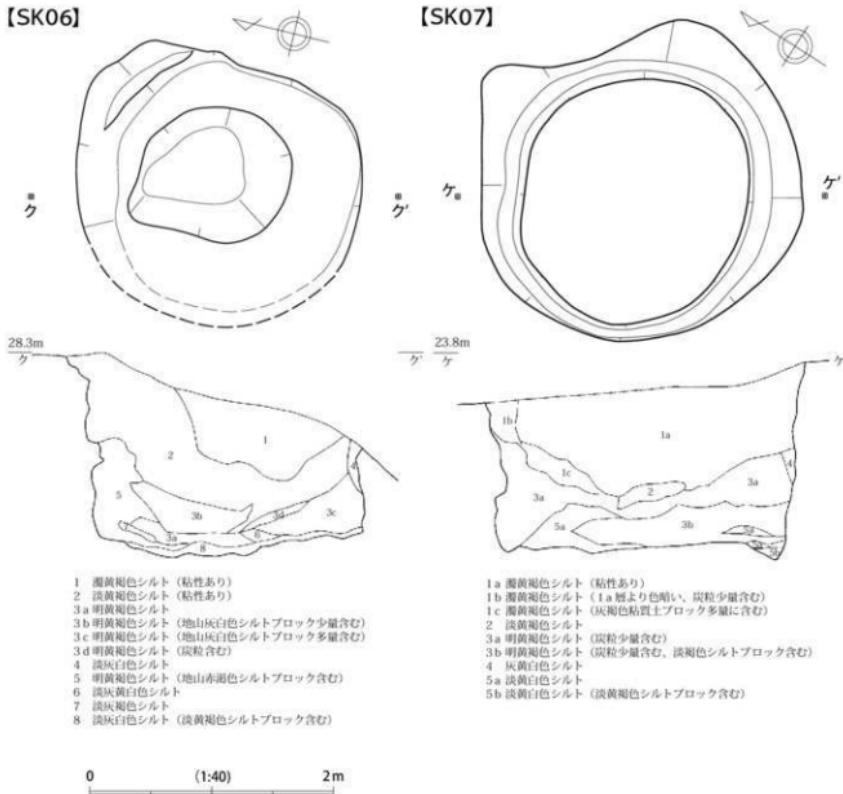


## (SK04出土遺物)

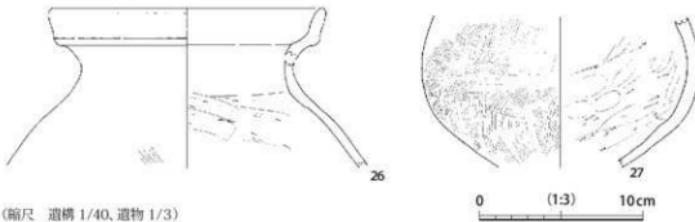


(縮尺 遺構 1/40、遺物 1/3)

第15図 掘出遺構・遺物3 (SK04・05)



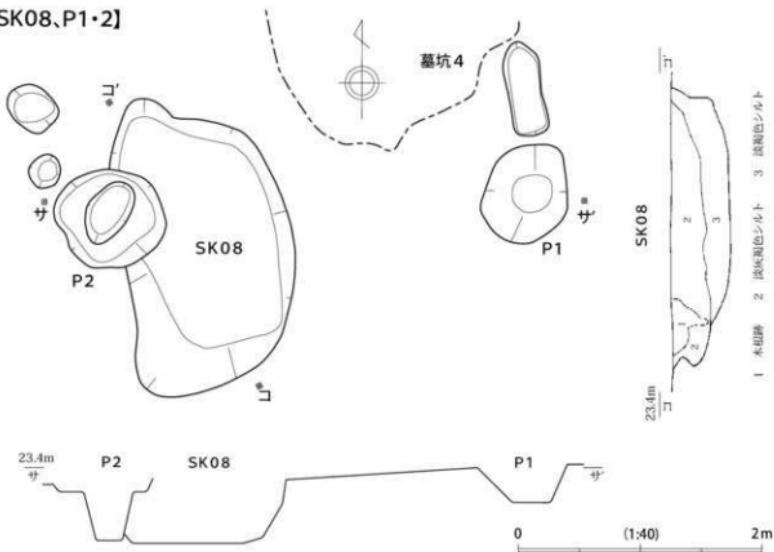
(SK07出土遺物)



(縮尺 遺構 1/40、遺物 1/3)

第16図 検出遺構・遺物4 (SK06・07)

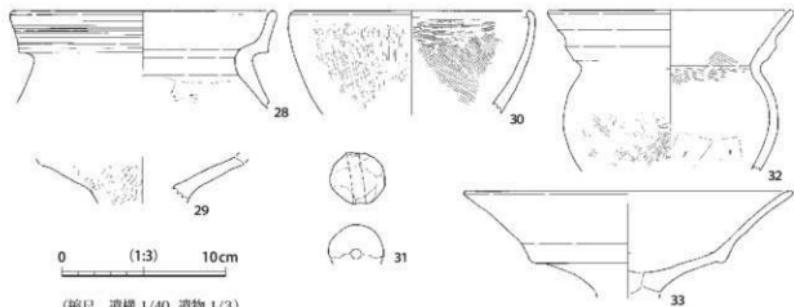
## [SK08, P1・2]



(SK08出土遺物)

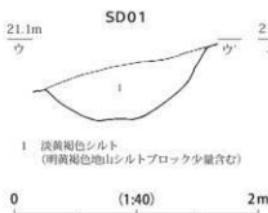
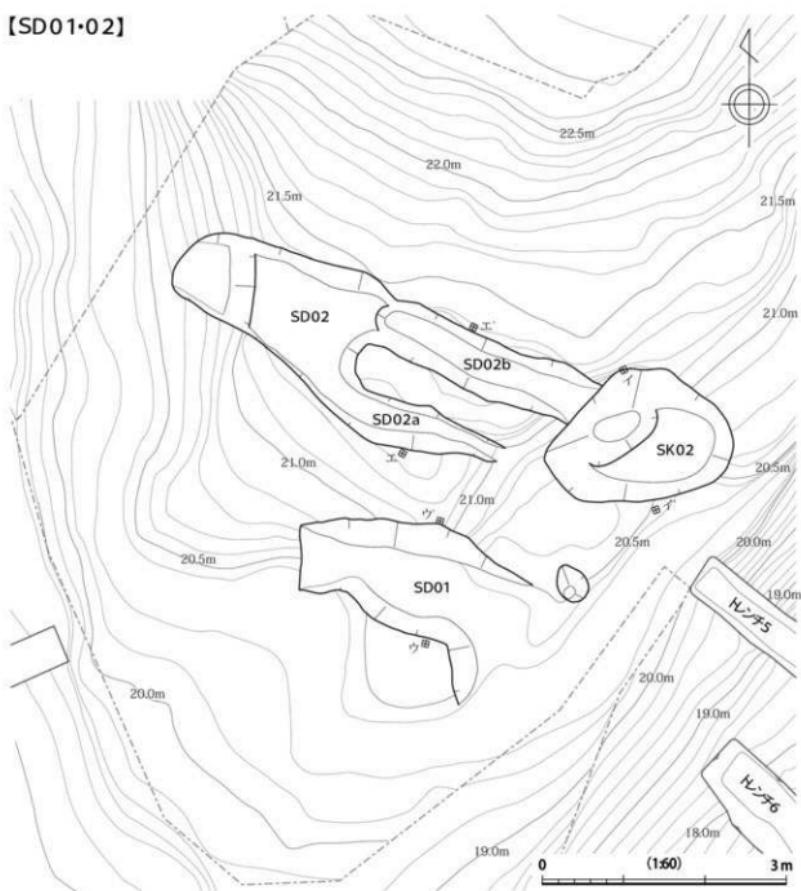
(P1出土遺物)

(3区検出面出土遺物)



第17図 検出遺構・遺物5 (SK08, P1・2)

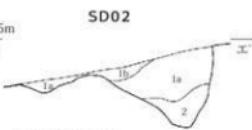
【SD01・02】



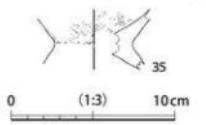
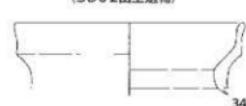
1 淡黄褐色シルト  
(明黄褐色地山シルトブロック少量含む)

0 (1:40) 2m

(縮尺 平面図 1/60、断面図 1/40、遺物 1/3)

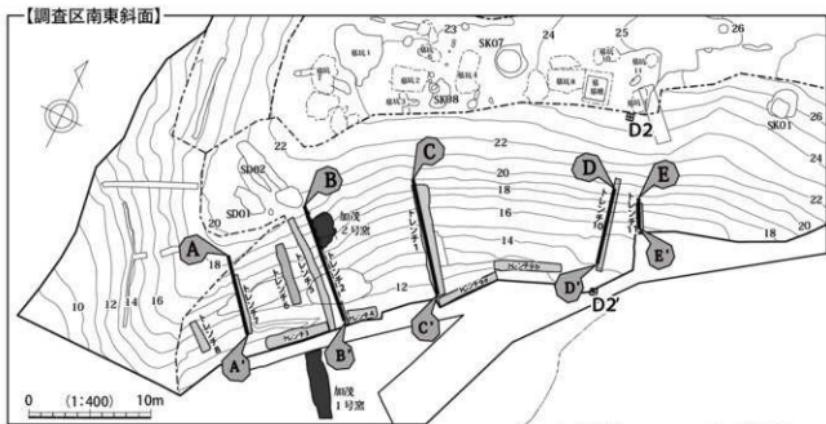


1a 明灰黄褐色シルト  
1b 明灰黄褐色シルト  
(明黄褐色地山シルトブロック少量含む)  
2 明黄褐色シルト



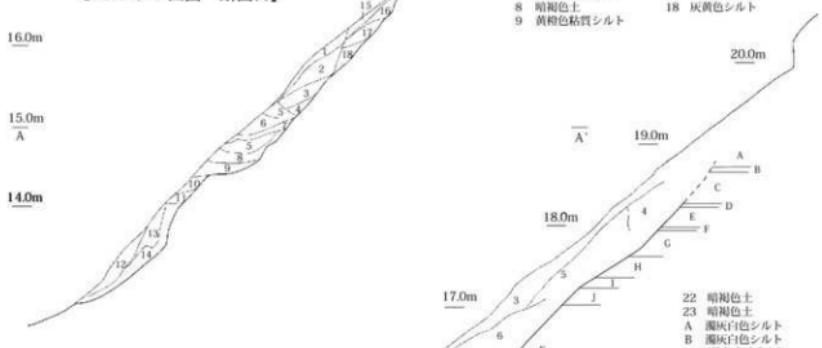
0 (1:3) 10cm

第18図 掘出構造・遺物6 (SD01・02)



- 1 暗褐色土
- 2 黄褐色シルト
- 3 黄灰褐色シルト
- (白色粘土にロック入る)
- 4 黄灰褐色シルト
- 5 淡褐色灰土
- 6 黄灰褐色シルト
- 7 暗褐色色土
- 8 暗褐色土
- 9 黄褐色粘質シルト
- 10 灰白色土
- 11 黄褐色シルト
- 12 [土色] 暗褐色土
- 13 淡灰褐色シルト
- 14 黄褐色シルト
- 15 淡褐色灰土
- 16 暗褐色土
- 17 暗褐色シルト
- 18 灰黄色シルト

【トレンチ7西面 断面A】



- 22 暗褐色土
- 23 暗褐色土
- A 淡灰白色シルト
- B 淡灰白色シルト
- (鉄分多く含む)
- C 黄白色砂
- D 灰白色シルト
- E 灰白色シルト
- (1~2cm 大礫縫に混)
- F 灰白色シルト
- G 黄白色砂 (0.2~2cm  
大礫多く混)
- H 灰白色シルト
- I 灰白色シルト
- J 灰白色シルト
- K 黄白色シルト
- L 暗褐色シルト
- M 灰白色シルト
- N 暗褐色シルト

【トレンチ2西面 断面B】



- 1 暗褐色土
- 2 黄褐色シルト
- 3 黑褐色土
- 4 黑褐色土
- 5 暗褐色土
- 6 黄褐色シルト質土
- 7 黄灰色土 (燒土含)
- 8 暗褐色土
- 9 黑褐色土
- 10 灰褐色シルト質土
- 11 黄褐色シルト質土
- 12 暗褐色シルト
- 13 白色粘土
- 14 暗褐色土
- 15 相模
- 16 暗褐色土
- 17 淡灰褐色シルト質土
- 18 淡灰褐色シルト
- 19 暗褐色土
- 20 黄褐色シルト
- 21 灰色粘質土

第19図 掘出遺構・遺物7(南東斜面1)

【トレンチ1西面 断面C】

- |                          |                 |           |
|--------------------------|-----------------|-----------|
| 1 【表土】褐色土（土師器混入）         | 15 暗灰色粘質シルト     | 24 黄褐色土   |
| 2 【表土】明褐色土               | 16 黄褐色シルト質土     | 25 灰黄色土   |
| 3 褐色土（しまりあり）             | 17 灰黄色土         | 26 褐色土    |
| 4 暗褐色シルト<br>(鉄生土器、須恵器入る) | 18 黄褐色シルト質土     | 27 黄褐色シルト |
| 5 黄褐色シルト質土               | 19 灰黄色土 17層より暗い | 28 黄褐色シルト |
| 6 黄褐色シルト（地山質土）           | 20 暗褐色土         |           |
| 7 灰白色粘土                  | 21 黄褐色シルト質土     |           |
| 8 喀斯特粘質シルト               | 22 暗褐色灰土        |           |
| 9 灰黄色土                   | 23 黄白色シルト       |           |
| 10 灰褐色シルト質土              |                 |           |
| 11 灰白色粘質シルト              |                 |           |
| 12 灰白色粘土                 |                 |           |
| 13 灰黄色土                  |                 |           |
| 14 黄褐色シルト質土              |                 |           |



【トレンチ10西面 断面D 2】

0 (1:100) 5m



【トレンチ10  
下半部 断面D】

21.0m— 20.0m— 19.0m— 18.0m— 17.0m— 16.0m— 15.0m— 14.0m—

15.0m— 16.0m—

【トレンチ11西面 断面E】

1 明黄褐色シルト  
2 淡黄褐色シルト（旧表土上部、  
下部は色、漸移的に淡くなる）

3 淡黄褐色シルト  
(灰白色シルトブロック少し含む)

4 淡褐色粘質土  
(灰白色シルトブロック少し含む)

5a 淡黄褐色シルト（淡褐色シルトブロック含む、  
灰白色シルトブロック少し含む）

5b 淡黄褐色シルト（鉄分多く含む）

6 淡褐色粘質土（旧表土？）

7 淡黄褐色砂

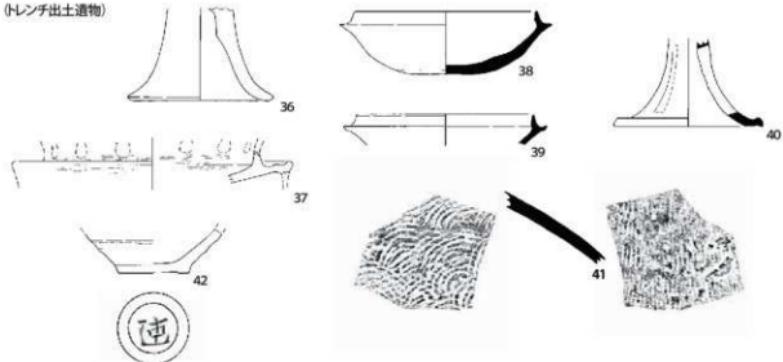
- |                                    |          |
|------------------------------------|----------|
| 1a 淡黄褐色砂                           | 16.0m E' |
| 1b 淡黄褐色砂（鉄分多く含む、<br>1cmの大粒砂少々含む）   |          |
| 1c 淡黄褐色砂（鉄分含む）                     |          |
| 2 (トレンチ1、5a層同じ)                    | 17.0m    |
| 3 淡灰褐色粘質土（旧表土？、<br>淡褐色粘質土ブロック少々含む） |          |

0 (1:60) 3m

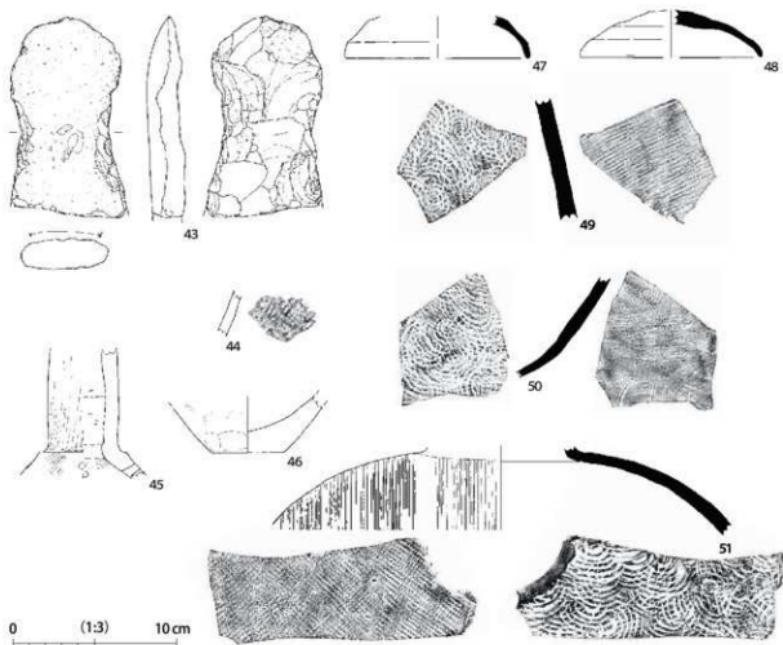
(縮尺 トレンチ10西面: 1/100, その他: 1/60)

第20図 検出構造・遺物8(南東斜面2)

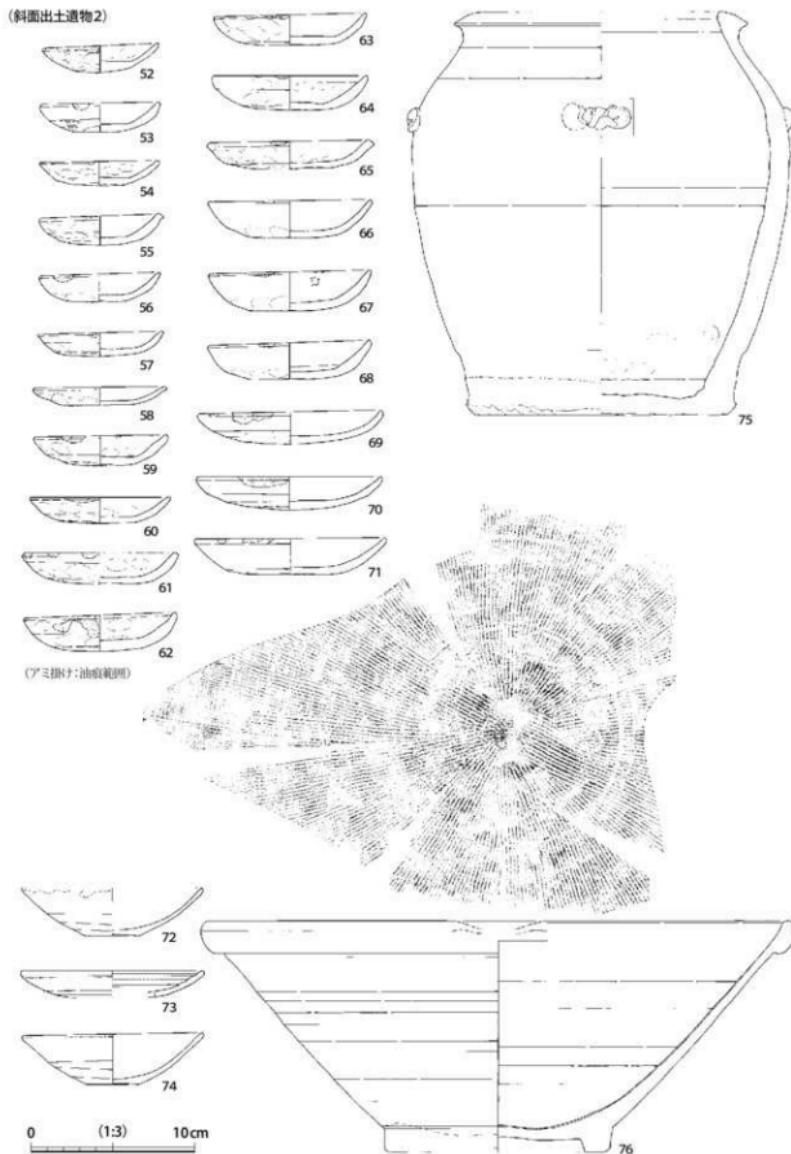
## (トレンチ出土遺物)



## (南東斜面出土遺物1)

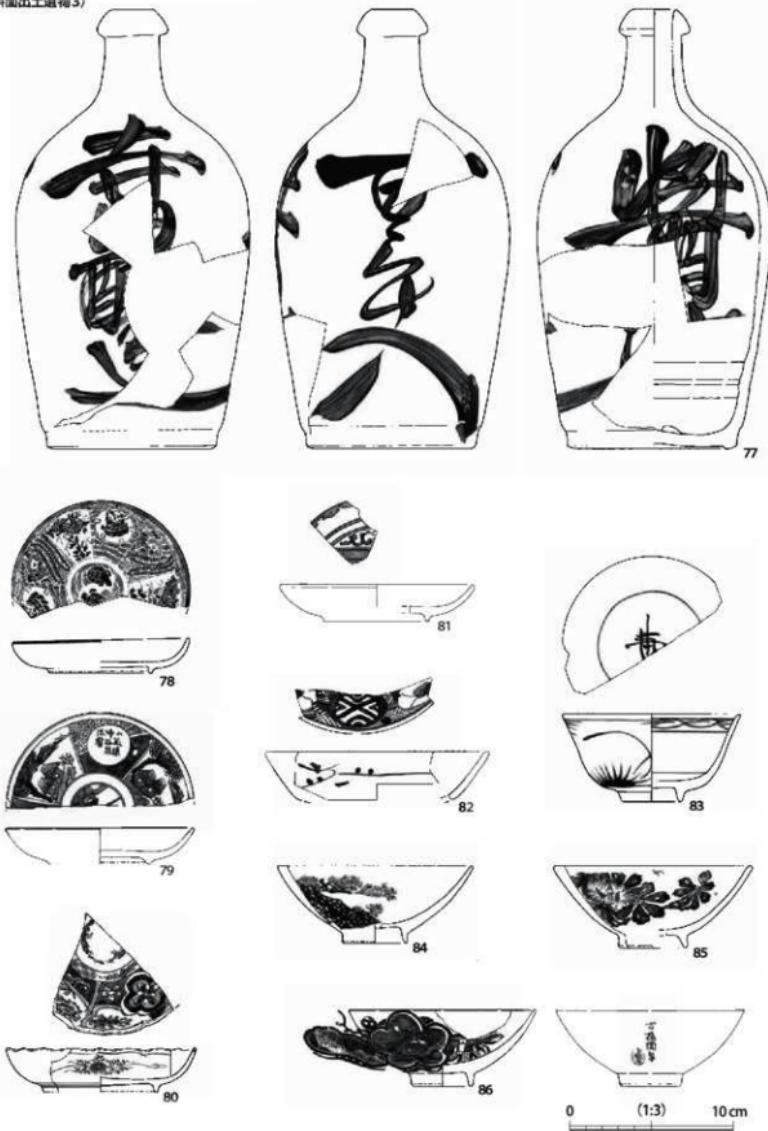


第21図 検出遺構・遺物9(トレンチ、南東斜面遺物1)



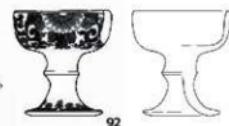
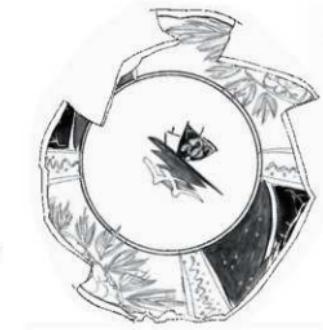
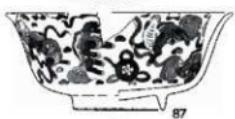
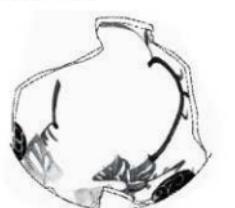
第22図 検出遺構・遺物10(南東斜面遺物2)

(斜面出土遺物3)



第23図 掘出遺構・遺物11(南東斜面遺物3)

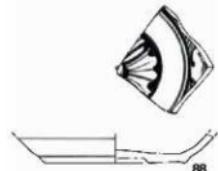
(斜面出土遺物4)



92



93



0 (1:3) 10 cm



91



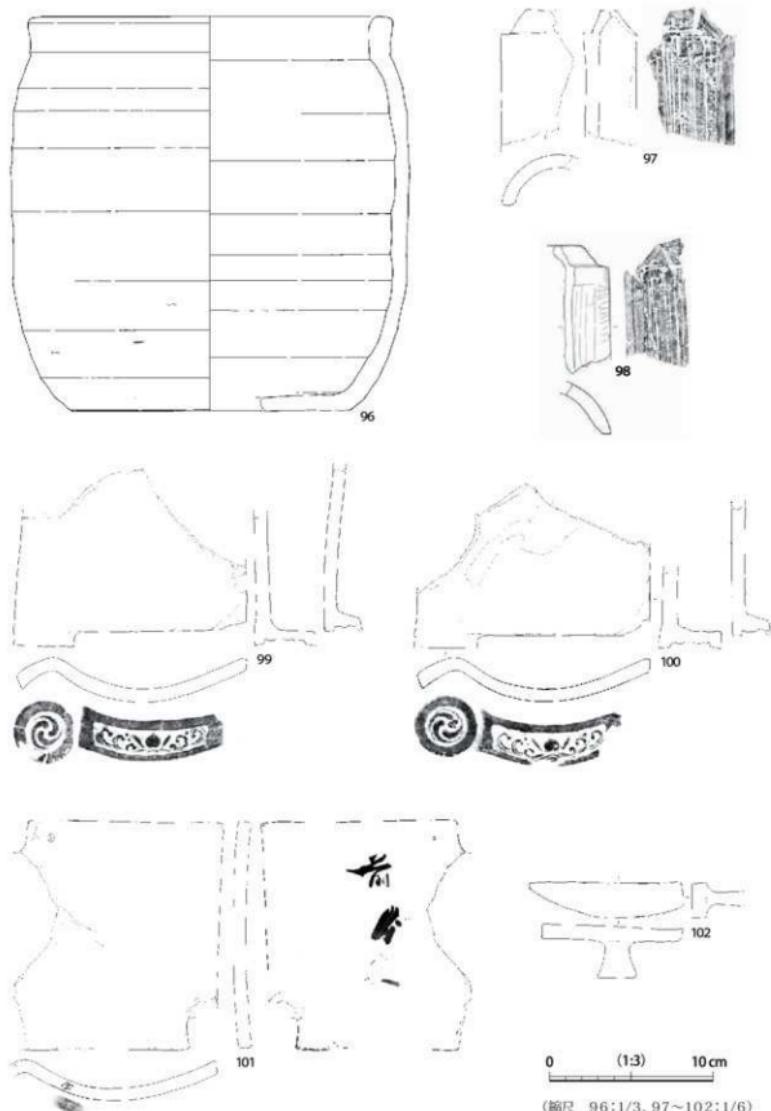
94



95

第24図 検出遺構・遺物12(南東斜面遺物4)

(斜面出土遺物5)



第25図 検出遺構・遺物13(南東斜面遺物5)

報告 番号	出土地区・遺構	遺物種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	脚高 (cm)	器面調整、その他法量、備考	同化 番号
1/12 2-1区 SK01	弥生土器 壺	弥生土器 壺					内調整：付、外調整：摩耗により不明、つまみ径4.3cm	C19
2/12 2-1区 SK01 東半	弥生土器 高环or器台			22.0			内調整：摩耗により不明、外調整：付	C25
3/12 2区 SK02	土師器 盆	土師器 盆	盆	7.2	3.9	1.6	内調整：付、外調整：付、口縁部油漬1ヶ所	D27
4/12 2区 SK02	土師器 盆	土師器 盆	盆	7.4	3.9	1.5	内調整：付、外調整：付、口縁部油漬1ヶ所、底部穿孔	D31
5/12 2区 SK02	土師器 盆	土師器 盆	盆	8.7	5.0	2.0	内調整：付、外調整：付、口縁部油漬3ヶ所、外面指圧痕	D32
6/12 2区 SK02	土師器 盆	土師器 盆	盆	9.3	4.4	1.7	内調整：付、外調整：付、口縁部油漬1ヶ所、外面指圧痕	D30
7/12 2区 SK02	土師器 盆	土師器 盆	盆	9.4	4.5	2.2	内調整：付、外調整：付、口縁部油漬1ヶ所	D29
8/12 2区 SK02	土師器 盆	土師器 盆	盆	9.8	4.4	2.2	内調整：付、外調整：付、口縁部油漬1ヶ所、外面指圧痕	D28
9/12 2区 SK02-2区 I区上	瓦質土器 壺			20.8		4.5	内調整：付、外調整：付、つまみ径4.6cm、内・外面 黒地	D14
10/12 2区 SK02	軸陶瓦 軸桟瓦						全長29.3cm、厚1.9cm、軸丸瓦・瓦当径7.6cm、文様区径4.9cm、 瓦当厚2.0cm、軸平瓦・文様区厚3.0cm、瓦当厚4.9cm、額高3.4cm、 額下部厚2.0cm	D5
11/12 3区 SK03	弥生土器 壺	弥生土器 壺	壺	14.4			内調整：摩耗により不明、外調整：摩耗により不明	C15
12/12 3区 SK03	弥生土器 壺	弥生土器 壺	壺				内調整：付、時々、外調整：付、摩耗、脇詰最大径32.0cm	C29
13/12 3区 SK03	弥生土器 高環	弥生土器 高環	高環				内調整：付、下半摩耗、外調整：付、下半摩耗、孔5ヶ所	C13
14/12 3区 SK03	弥生土器 高环or器台	弥生土器 高环or器台	高環	17.3			内調整：付、外調整：付、孔2ヶ所、内面は付着	C14
15/12 3区 SK04	弥生土器 壺	弥生土器 壺	壺				内調整：摩耗により不明、外調整：摩耗により不明	C10
16/12 3区 SK04	弥生土器 壺	弥生土器 壺	壺	13.1			内調整：摩耗により不明、外調整：付、付	C23
17/12 3区 SK04	弥生土器 壺	弥生土器 壺	壺	14.0			内調整：付、付、付、外調整：付、付	C12
18/12 3区 SK04	弥生土器 壺	弥生土器 壺	壺	13.9			内調整：付、付、外調整：付、付	C11
19/12 3区 SK04	弥生土器 (底部)	弥生土器 (底部)		4.0			内調整：不明、外調整：付、付	C7
20/12 3区 SK04	弥生土器 (底部)	弥生土器 (底部)		4.0			内調整：摩耗により不明、外調整：摩耗により不明	C16
21/12 3区 SK04	弥生土器 (底部)	弥生土器 (底部)		3.8			内調整：付、外調整：付	C9
22/12 3区 SK04	弥生土器 高环	弥生土器 高环	高環	23.8			内調整：付、外調整：付	C20
23/12 3区 SK04	弥生土器 器台	弥生土器 器台	器台		12.2		内調整：付、外調整：付、外面赤彩	C21
24/12 3区 SK04	弥生土器 小型鋤	弥生土器 小型鋤	鋤				内調整：摩耗により不明、外調整：付、付	C22
25/12 3区 SK04	弥生土器 台付鉢	弥生土器 台付鉢	台付鉢				内調整：付、付、外調整：摩耗により不明	C8
26/12 3区 SK07	弥生土器 壺	弥生土器 壺	壺	16.5			内調整：付、付、外調整：付、付、外側に付着	C24
27/12 3区 SK07	弥生土器 壺	弥生土器 壺	壺				内調整：付、付、外調整：付	C26
28/12 3区 SK08/ 檜出面	弥生土器 壺	弥生土器 壺	壺	16.0			内調整：付、付、付、外調整：擬四瓣、三付	C6
29/12 3区 SK08	弥生土器 高環	弥生土器 高環	高環				内調整：摩耗により不明、外調整：付	C27
30/12 3区 P1	弥生土器 鍤	弥生土器 鍤	鍤	14.4			内調整：付、外調整：付	C30
31/12 3区 P1	土製品 土鍤	土製品 土鍤	土鍤		12.2		長3.2cm、幅3.4cm、孔径0.6cm、重量17.0g	C28
32/12 3区 檜出面	弥生土器 小型壺	弥生土器 小型壺	壺	15.0			内調整：付、付、外調整：付、付、外側に付着	C4
33/12 3区 檜出面	弥生土器 高環	弥生土器 高環	高環	20.0			内調整：不明、外調整：不明	C5
34/12 2区 SD02a,b	弥生土器 壺	弥生土器 壺	壺	14.0			内調整：摩耗により不明、外調整：摩耗により不明	C17
35/12 2区 SD02a,b	弥生土器 有台鉢	弥生土器 有台鉢	有台鉢				内調整：付、付、外調整：付、付	C18
36/11 南東斜面 4号1	弥生土器 高環	弥生土器 高環	高環	8.5			内調整：摩耗により不明、外調整：摩耗により不明	C1
37/11 南東斜面 4号2	弥生土器 装飾器台	弥生土器 装飾器台	器台				内調整：付、外調整：付	C2
38/11 南東斜面 4号3	須恵器 环身	須恵器 环身	环身	11.2		39	内調整：付、外調整：付、外調整：付	D23
39/11 南東斜面 4号4	須恵器 环身	須恵器 环身	环身	10.8			内調整：付、外調整：付	D22
40/11 南東斜面 4号4	須恵器 高環	須恵器 高環	高環	9.2			内調整：付、外調整：付	D21
41/11 南東斜面 4号4 下層	須恵器 壺	須恵器 壺	壺				内調整：当て具痕、外調整：付後付、外側附	D24
42/11 南東斜面 4号5	陶器 瓶	陶器 瓶	瓶	4.4			外調整：付、付、付、付、外側付、付切込、鉢輪、素地色：淡黄白、底部外面 墨書き「丁」	D4
43/11 南東斜面 表土除去	石製品 打製石斧	石製品 打製石斧	石斧				最大長(12.4)cm、最大幅(7.2)cm、最大厚(2.4)cm、重量(265.2)g 石1	
44/11 南東斜面 壁上土礫	礫土器 砕錐	礫土器 砕錐	礫土器 砕錐				内調整：付、外調整：礫文、外面スス付着	D33
45/11 南東斜面 表土剥離	弥生土器 高环or器台	弥生土器 高环or器台	高環				内調整：付、付、外調整：付、外調整：付	C3
46/11 南東斜面 4表土剥離	弥生土器 (底部)	弥生土器 (底部)		4.5			内調整：摩耗により不明、外調整：付、付	D36
47/11 南東斜面 2表土剥離	須恵器 环蓋	須恵器 环蓋	环蓋	(11.2)			内調整：付、外調整：付	D17
48/11 南東斜面 壁下土塊内	須恵器 环蓋	須恵器 环蓋	环蓋	(11.2)			30内調整：付、付、外調整：付、付、外調整：付、付、ゆがみ大きい	D20
49/11 南東斜面 表土除去	須恵器 横瓶	須恵器 横瓶	横瓶				内調整：当て具痕、外調整：付	D35
50/11 南東斜面 2表土剥離	須恵器 横瓶	須恵器 横瓶	横瓶				内調整：当て具痕、外調整：付、付目	D18
51/11 南東斜面面上 黒色土	須恵器 横瓶	須恵器 横瓶	横瓶				内調整：当て具痕、外調整：付、付目	D19
52/11 南東斜面 表土除去	土師器 盆	土師器 盆	盆	7.0		1.6	内調整：付、外調整：付、口縁部油漬3ヶ所	D38
53/11 南東斜面 表土除去	土師器 盆	土師器 盆	盆	7.1	2.5	1.8	内調整：付、外調整：付、口縁部油漬1ヶ所	D51
54/11 南東斜面 表土除去	土師器 盆	土師器 盆	盆	7.2	3.3	1.5	内調整：付、外調整：付、口縁部油漬1ヶ所	D40
55/11 南東斜面 表土除去	土師器 盆	土師器 盆	盆	7.3	3.0	1.9	内調整：付、外調整：付、口縁部油漬1ヶ所	D39
56/11 南東斜面 表土除去	土師器 盆	土師器 盆	盆	7.3	3.4	1.8	内調整：付、外調整：付、指圧痕、口縁部油漬2ヶ所	D50
57/11 南東斜面 表土除去	土師器 盆	土師器 盆	盆	7.6	4.5	1.4	内調整：付、外調整：付、口縁部油漬1ヶ所	D37
58/11 南東斜面 表土除去	土師器 盆	土師器 盆	盆	8.0	4.8	1.2	内調整：付、外調整：付、指圧痕、口縁部油漬1ヶ所	D52
59/11 南東斜面 表土除去	土師器 盆	土師器 盆	盆	8.1	4.2	1.8	内調整：付、外調整：付、口縁部油漬4ヶ所	D41
60/11 南東斜面 表土除去	土師器 盆	土師器 盆	盆	8.6	4.4	1.6	内調整：付、外調整：付、口縁部油漬1ヶ所	D43
61/11 南東斜面 表土除去	土師器 盆	土師器 盆	盆	9.2	4.6	1.9	内調整：付、外調整：付、口縁部油漬3ヶ所	D44
62/11 南東斜面 表土除去	土師器 盆	土師器 盆	盆	9.2	3.2	2.2	内調整：付、外調整：付、口縁部油漬2ヶ所	D46

第2表 出土遺物観察表1

報告 番号	年度	出土地区・遺構	遺物種類	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	脚高 (cm)	器面調整、その他法量、備考	同化 番号
63	11	南東斜面 表土除去	土師器	皿	9.3	4.2	1.9	内調整：なし。外調整：なし、指圧痕、口縁部油痕2ヶ所	D47
64	11	南東斜面 表土除去	土師器	皿	9.4	4.0	2.1	内調整：なし、外調整：なし、口縁部油痕2ヶ所	D42
65	11	南東斜面 表土除去	土師器	皿	9.8	5.4	1.7	内調整：なし、外調整：なし、口縁部油痕2ヶ所	D45
66	11	南東斜面 表土除去	土師器	皿	9.8	5.4	2.3	内調整：なし、外調整：なし、指圧痕痕、口縁部油痕1ヶ所	D53
67	11	南東斜面 表土除去	土師器	皿	9.8	4.4	2.5	内調整：なし、外調整：なし、指圧痕痕、口縁部油痕2ヶ所	D55
68	11	南東斜面 表土除去	土師器	皿	9.8	4.4	2.4	内調整：なし、外調整：なし、指圧痕痕、口縁部油痕1ヶ所	D56
69	11	南東斜面 表土除去	土師器	皿	11.1		2.0	内調整：なし、外調整：なし、指圧痕痕、口縁部油痕2ヶ所	D49
70	11	南東斜面 表土除去	土師器	皿	11.2		2.1	内調整：なし、外調整：なし、口縁部油痕1ヶ所	D54
71	11	南東斜面 表土除去	土師器	皿	11.6	5.0	2.3	内調整：なし、外調整：なし、口縁部油痕1ヶ所	D48
72	11	南東斜面 表土除去	陶器	皿	11.0	3.3	3.0	内調整：なし、外調整：なし、口縁部油痕、灰釉、釉色：灰-赤、浅黄、内面質感あり	D10
73	11	南東緩斜面 №4	陶器	皿	11.2	5.0		内調整：なし、外調整：なし、口縁部油痕、釉色：褐	D7
74	11	南東斜面 表土除去	陶器	皿	11.2	3.2	3.1	内調整：なし、外調整：なし、口縁部油痕、釉色：灰-黄、内面質感あり	D9
75	11	南東斜面表土除去／斜面表土上／斜面6表土掘削	陶器	壺(骨壺)	14.5	15.4	19.9	素地色：橙、釉色：明示未記、他なし。釉色：明示未記、他なし。把手2ヶ所か？	D6
76	11	南東斜面表土上／斜面表土除去／斜面6表土掘削	陶器	すり鉢(片口)	35.5	133	142	素地色：灰-黄、釉色：外-暗褐、内-鈍黃褐、おろし目1単位12条	D8
77	11	南東斜面表土掘削／緩斜面No.3／斜面1表土掘削／斜面表土除去	陶器	德利	2.6	9.0	27.1	灰釉、外面文字：黒灰-灰、内面底部滑着物あり	染18
78	11	南東緩斜面 表土上	磁器	皿	10.8	6.4	2.1	染付(銅版印刷)	染15
79	11	南東緩斜面 表土掘削／緩斜面No.19	磁器	皿	11.3	6.3	2.2	染付(銅版印刷)、口ヒビ	染14
80	11	南東緩斜面 表土上／斜面表土除去	磁器	皿	11.6	7.0	2.7	染付、色絵(朱、金)、墨線3条	染16
81	11	南東緩斜面 表土上	磁器	皿	12.2	6.2	2.3	染付(銅版印刷)	染13
82	11	南東緩斜面 表土掘削	磁器	皿	13.8			染付	染2
83	11	南東斜面表土掘削	磁器	碗	10.8	3.6	5.4	染付	染1
84	11	南東斜面 表土除去	磁器	碗	11.9	4.8	4.8	染付(銅版印刷)、松の木	染10
85	11	南東斜面 表土除去	磁器	碗	12.0	4.0	5.1	染付(銅版印刷)；黒灰	染9
86	11	南東緩斜面 №21	磁器	碗	11.4	3.5	4.7	染付(銅版印刷)；青、緑。緑外面文字「古梅園製」	染17
87	11	南東斜面 6表土掘削／斜面表土1表土掘削／緩斜面表土掘削	磁器	鉢	13.8	5.4	6.0	染付(銅版印刷)、内面色絵(利ア灰、朱)、底部外面文字「盛米園製」	染12
88	11	南東緩斜面 №33	磁器	鉢			8.4	肥前染付	染3
89	11	南東斜面 表土除去	磁器	香炉	10.6	5.1	5.5	有三足の平頭形 色絵(赤、緑)、青緑色部分大方剥離、削り出し高台	染7
90	11	南東斜面 表土除去／斜面表土上／緩斜面表土上	磁器	鉢	19.4	9.2	6.5	色絵(朱、模、利ア灰、白泥)	染4
91	11	南東斜面表土除去／斜面表土上／緩斜面表土上	磁器	鉢	22.8	11.8	7.1	染付、蛇の目高台	特染1
92	11	南東斜面表土上／斜面表土除去	磁器	仏瓶	5.7	3.4	6.5	染付(銅版印刷)花に唐草文様	染5
93	11	南東斜面 表土除去	磁器	花瓶	3.0	6.5	12.7	白磁、底部外面押印「登録59101」、口縁部外面ふきさ3ヶ所	染6
94	11	南東斜面 表土除去	磁器	花瓶	3.7	5.0	12.2	色絵(朱、紫、緑、金、下)、色絵剥離、口縁部金継が具残る、朱は1対あり。「KINJOCHINA 蝶」裏印(文字緑色)	染8
95	11	南東斜面 表土除去	磁器	プリンカップ	6.0	4.2	6.0	白磁、印刷「FUJIYA カードドア」、容量はほ100ml	染11
96	11	南東斜面表土除去／斜面6表土掘削／緩斜面	瓦質土器	壺(骨壺)	22.0	17.0	24.3	内調整：なし、外調整：なし、口縁部外黒帯り、12年程度2段SKD(現代土壺)、2区(1区上)と接合	D13
97	11	南東斜面④ 表土掘削	軸巻瓦	丸瓦				体部全長(16.7)cm、体幅(8.9)cm、玉縁長29cm、体部高6.6cm、体部幅1.7cm、玉縁高4.5cm、釉色：暗赤灰	D12
98	11	南東斜面 表土除去	軸巻瓦	丸瓦				体部全長(15.8)cm、体部幅(7.1)cm、玉縁長2.4cm、体部厚1.6cm、釉色：褐灰	D34
99	11	南東斜面 表土	軸巻瓦	小丸付き軸巻瓦				丸瓦：全長28.3cm、全幅(25.9)cm、平部切込長(3.7)cm、平部切込幅3.4cm、丸瓦切込長3.8cm、丸瓦切込幅(1.0)cm、丸瓦底幅3.0cm、平部弧度3.4cm、押印、裏面に墨書「前□□」あり	D3
100	11	南東斜面 表土除去	軸巻瓦	小丸付き軸巻瓦				小丸瓦：瓦当径7.6cm、文様区径4.7cm、瓦当厚2.2cm、体部：瓦底弧度3.3cm、平部弧度39cm、厚み1.5cm、軒平瓦当：上弧幅28.6cm、文様区幅14.0cm、文様区厚2.8cm、瓦当厚4.7cm、頂高2.9cm、額下部厚1.4cm	DI
101	11	南東斜面 表土除去	軸巻瓦	丸瓦				丸瓦：全幅28.7cm、瓦底弧度26cm、平部弧度39cm、押印あり	D2
102	11	南東斜面 表土除去	軸巻瓦	面戸瓦				面戸瓦：幅19.0cm、高さ4.5cm、厚さ1.8cm、奥行6.4cm	D11

第3表 出土遺物観察表2





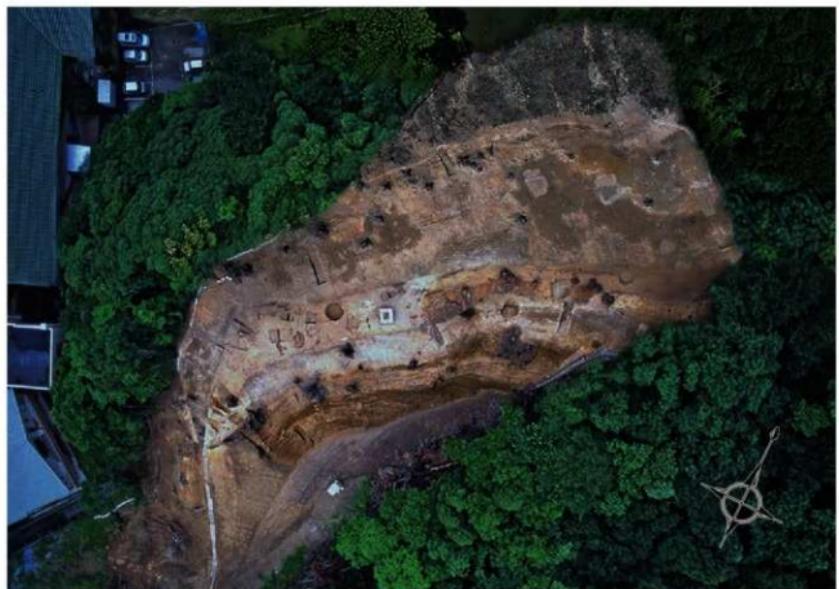
調査地を北東から望む(河北渓干拓地遠望、4区調査時)



調査地を南西から望む(1・2区調査時)



調査地を南西から望む(3区調査時)



調査区全景(俯瞰、合成写真)



尾根上部（3区）全景（南西から）



尾根上部（3区）西侧全景（北東から）



SK 01 完壊状況(南から)



SK 01 検出状況(南西から)



SK 01 土層断面A(東から)



SK 01 完壊状況(北から)



SK 02 完壊状況(北西から)



S K 03 完掘状況(南西から)



S K 03 土層断面(西から)



S K 04・05 完掘状況(北東から)



S K 06 土層断面(西から)



S K 06 完掘状況(西から)



S K 07 完堀状況(南西から)



S K 07 土層断面ケ(南西から)



S K 07 底面壁溝(南西から)



S K 08 土層断面サ(北東から)



尾根上部(3区)西側、調査着手前の状況(北東から)



尾根先端部(SD 01・02、加茂2号窓)完掘状況(南から)



SD 01・02完掘状況(尾根上から)



SD 02 完掘状況(南東から)



SD 01 土層断面ウ(東から)



SD 02 a 土層断面工(南東から)



SD 02 b 土層断面工(南東から)



加茂 2号窓完掘状況(南東から)



調査区北東壁断面B(上半、南西から)



発掘作業風景(北東から)



丘陵縦断面(左写真の尾根を縦に切った状況、南東から)











土師器皿

## 報告書抄録

## 津幡町 能瀬南B遺跡

発行日 平成28(2016)年2月26日

発行者 石川県教育委員会

〒920-8575 石川県金沢市輪月1丁目1番地

電話 076-225-1842 (文化財課)

公益財団法人石川県埋蔵文化財センター

〒920-1236 石川県金沢市中戸町18番地1

電話 076-229-4477

E-mail address mail@ishikawa-maibun.or.jp

印 刷 萩川印刷株式会社